乙女はお姉様に恋してる～群青の君～

Thalys-hiiragi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
乙女はお姉様に恋してる～群青の君～

【Ｎコード】
Ｎ１２８２Ｔ

【作者名】
Ｔｈａｌｙｓ－ｈｉｉｒａｇｉ

【あらすじ】
ある日起きたら女の子になってしまった主人公「美澄　歌織」（みすみ　かおり）は親戚の薦めで伝統あるお嬢様学校へと編入することになってしまった。
彼は２年生から３年生の２年間をどう過ごしていくのでしょうか。

主人公設定＋その他設定紹介

主人公
鷺宮（さぎのみや）　歌織（かおり）

二つ名：群青の君

本名：美澄（みすみ）　歌織（かおり）

年齢：１７歳（２年生進級時に編入）

誕生日：４月２日牡羊座

身長：１６８？

所属：２年Ｃ組

血液型：Ａｘ型（ＡＢＯ式血液型におけるＡ型の亜種、Ｏ型と判定されることもある）

両親：両親共にハーフで父がドイツ人とイギリス人のハーフ、母が日本人とフィンランド人のハーフ（本人の国籍は日本）

外見
ショートカットの銀髪に群青色の瞳でフレームレスのメガネをかけ、透き通るような白い肌をしている（顔以外どこをどう見ても北欧人）

資格または特記事項
・国際コミュニケーション英語能力テスト（通称ＴＯＥＩＣ）にお

いて９８０点を獲得
・普通自動２輪免許

特技・趣味
料理・プログラミング・写真・旅行

自宅
・東京都新宿区四谷（姉の家）
・静岡県下田市

家族構成

父親（ジム・Ａ・美澄）：フリーカメラマン。彼女の趣味（写真）は彼の影響。

母親（美澄・Ｅ・美雪）：美澄製薬（鏑木財閥グループ企業）社長。
鏑木　慶行（瑞穂の父）とは従姉妹の関係である。

姉（美澄　桜）：ＪＲ貨物運転士。転校するまで歌織は彼女のマンションに住んでいた。

妹（名前非公開）：歌織の双子の妹。

その他親戚

宮小路　瑞穂（本名：鏑木瑞穂）：歌織とは遠縁だが親戚関係になる。第７２代エルダーシスター。

歌織が女になってしまった原因：遺伝子＋ホルモンバランスの異常が原因と考えられているが詳細は分かっていない

その他設定
時間軸：2人のエルダーの翌年。

登場決定キャラクター（紹介は原作初登場時）
初代
・宮小路　瑞穂
・上岡　由佳里
・高島　一子（名前のみ）
・周防院　奏
・厳島　貴子

櫻の園のエトワール
・ケイリ・グランセリウス

2人のエルダー
・栢木　優雨
・宮藤　陽向
・妃宮　千早
・神近　香織理

登場予定キャラクター（※話の都合上登場しない場合や名前のみの場合があります）
初代
・十条　紫苑
・小鳥遊　圭

櫻の園のエトワール
・七々原　薫子

・皆瀬　初音

2人のエルダー

・度會　史

・冷泉　淡雪

・昕　雅楽乃

聖應学院の二次設定

・学院の所在地は東京都多摩地域南部、校舎からは高尾山が見える。

・歌織の担任は梶浦　緋紗子。

主人公設定＋その他設定紹介（後書き）

正直、データはまとめておかないと後悔する物だと感じましたw
一太郎ファイルを上へ行き下へ行きと言う状態でしたからね

第1話の方はもう少しお待ちください。

プロローグ（前書き）

この作品にはガールズラブ、もしくはそれに類する表現が含まれています。
苦手な方は見ない事をおすすめいたします。

作品の裏話や次回予告などは後書きで書きますのでとりあえず駄文ですがお楽しみいただければ幸いです。

プロローグ

プロローグ
僕は、世界で一番不似合いな場所になっているんではないか、それはほぼ確信を持っていえるとことだった。

ここは聖應女学院高等部、戦前より続く伝統あるお嬢様学校だ。
僕がここに転校することになったのは約1ヶ月前のこと・・・・僕の親戚にここの卒業生が居た・・・その人に勧められたのだ。

僕は半年前に人生観を１８０度覆すようなことがあった。
まあ、一人称で推測できるのではないかと思うが、もちろん男である。
確かに少し疲れていて間違えてしまったのかもしれないが・・・いくら何でも性別が変わってしまうとは思っていなかった。
翌日は大騒ぎになってしまった。
と言うわけで半年間女として過ごしたわけですが、僕が通っていたのは運悪く男子校・・・。

さすがにまずいと言うことで僕は2年生になると同時に転校することになったのだけれど、そこで進められたのがこの聖應女学院だった。
僕の母方の祖母がこの女学院の創設者の親族だったためこの学院に編入することになった
。確かに僕の姉も聖應女学の生徒で卒業生だったかな。

僕ははじめは断るつもりでいたのだけれど・・・つい1ヶ月前、親戚の人から驚くべき事実を聞かされることになった。
その人は聖應女学の卒業生、瑞穂さん、貴子さん、紫苑さんだった。

驚くべきなのは瑞穂さんは男性だったことだ、その上名前も形容も３６０度どこから見ても聖應の制服を着れば女に見えてしまうとのことと彼女が学園を代表する生徒であるエルダーをしていたことを聞いた。ちなみに僕の聖應の制服は瑞穂さんに付き添ってもらって採寸に行った。

僕は家からでは遠いので寮に入ることとなったのだけれど、そのとき瑞穂さんは

「確か僕が使っていた部屋はあの後又封印されてしまいましたけど、おそらく歌織さんなら大丈夫だと思いますし、あの部屋を使ってください」

と言われてしまった。

もちろん一子さんのことも聞いている。

結局僕は編入試験を受けて、ここにいる。

編入試験の結果は成績優秀だそうだ。

これから・・・僕はどうなってしまうのだろうか・・・不安だ。

プロローグ（後書き）

さて、プロローグでした。
初めましての方は初めまして、ブログ小説時代からの方はお久しぶりです。
Ｔｈａｌｙｓ－ｈｉｉｒａｇｉです。
再開して、やっとまともに連載できそうな時期に来たかなと思っていますが、僕はいつもぎりぎりの時に連載をスタートさせますねｗ
どんなってギリギリかはここでは言えませんが、とにかく連載はちゃんと進めたいですね。
では次回お会いいたしましょう。

第1話「憂鬱な姫君」（前書き）

書いたものをそのまま投稿するか、ある程度設定をぼやかして書くかと、どうしようか考えた結果そのまま投稿することにしました。

第1話「憂鬱な姫君」

～歌織サイド～
3月末の金曜日
こうして僕は今日、聖應女学院へと編入することになってしまった。
転校初日の朝、姉としばらく走らせられないバイクたちに別れを告げ、僕は早朝の中央線に乗った。
［この電車は中央快速の高尾行きです、四ッ谷を出ますと新宿・中野・三鷹・国分寺・立川と立川から終点高尾までの各駅に停車いたします。次は新宿・・・・］
スピーカーからはいつ聞いても個性的な車掌のアナウンスが聞こえている。
少し早い時間帯だがこの路線はは首都圏屈指の混雑路線だ・・・でもそれは上り線の話し。だけど下り線は少ないとはいえ混んでいるな・・・と思った。

僕が編入するのは2年生になった当日、つまり2年生からの編入だ。始業式は4月の月曜日だけどは手続きの関係上僕がむこうで行わなければ行けない物もあったのでちょっとだけ早い出発になってしまった。
今僕が持っているのは身の回りで持ち運べるだけのもの、つまりカメラやノートパソコン、シャーペンやボールペン、携帯電話や音楽プレイヤーなど・・・。
単調な音を聞いているとちょっと眠く・・・なって・・・
仕方なしに僕は携帯音楽プレイヤーで音楽を聴くことにした。

［毎度ご乗車いただきましてありがとうございました。次は終点、高尾、高尾です。お出口は左側です。高尾からさき大月方面ご利用のお客様は後からまいります各駅停車の大月行きをご利用下さい。

次は高尾・・・」
車掌さんのアナウンスを聞いて僕は座席をたった。
駅から徒歩数分で聖應女学院女子寮に着く。
過去に数万人の卒業生を輩出してきた学校の寮だけあって、何というか風格を感じる・・・気がするだけかもしれないけれど。
それでも歴史を感じさせる建物だった。旧開智学校に似てるな・・・と思ったけどあれは擬洋風建築だったっけ。
大きな荷物はすでに部屋に運び込まれているらしいので後は僕が整理するだけだと思う。
土日で整理出来ないほどの荷物じゃないし、覚悟を決めなくちゃいけないか・・・。

インターホンを押す
僕はもう覚悟を決めるしかないと深呼吸して
インターフォンを押した
ピンポーン・・・・・
あと2年は・・・女の子としての生活か・・・でもやりきるほか無いんだよな、もしボロを出しても一応何とかなるはずだけど、油断は禁物。
そう自分に言い聞かせるけど、頭の中は不安でいっぱいな上にやばい・・・真っ白になってきた。
・・・ガチャ
扉の開く音で我に返った
「はい」
ショートカットの女の子が出てきた
心の中で深呼吸して
「本日からお世話になります。鷺宮　歌織と申します」
出来るだけ優雅に女の子らしく笑顔を作る

～陽向サイド～
凄く綺麗な人・・・去年のお姉さまとどっちが綺麗かな
笑った顔もすごくかわいい。
「あの、私の顔に何かついていますか？」
いけない、いけないちょっと見とれちゃった
「いえ、何でもありません。連絡はもらっています。今年度の寮監を勤めることになりました宮藤　陽向です」
私も自己紹介
「鷺宮　香織です。よろしくお願いしますね」
改めて香織さんが挨拶してくれる。名前が香織理お姉さまと一緒なんだ。
「えっと香織さんの部屋は、二階の北側ですね、入寮式は新入生が入寮してきてからなので明日ですし、夕食の時間になったら呼びますので、荷物の整理でもして待っていてください」

香織サイド
キシキシと音のする階段を上がって
2階へ上がる、あまり階段は広くなかったのでカメラの入った専用バッグが何度も壁に当たりそうになってしまった。
北側の部屋、そう瑞穂さんが使用していた部屋だ。
ガチャ・・・・
そこには僕の想像を絶する、ピンクの世界が広がっていた。まあ基本的に瑞穂さんが卒業してから誰もこの部屋を使ってないからベットとか机とか、基本的には備え付けの物は変わっていないわけだし・・・・でも写真で見せてもらったまんまの壁紙だなぁ・・・・。
「すごくかわいい部屋ですね」
一緒に入った陽向さんはそう言うけれど・・・
「そうですか・・・自分のチョイスならばうれしいのですけれど・・・」
そうだよね・・・自分のチョイスならすごく嬉しいけど、僕が選ん

だ訳じゃないし趣味じゃない。
「そうなんですか？」
「そうですね、知らないうちに決まっていました」
苦笑しながら答えた

一人黙々と荷物の整理をする
「はぁ・・・一休みするか」
コンポから流れているラジオを聞きながらちょっと休憩
時計を見たけど始めてから約３０分くらいであらかた片付いてしまった。

ノートパソコンを立ち上げてたけどデスクトップの壁紙を見て変更したくはないけれど、しなければいけないだろうな・・・と思う。
結局僕は、仕方なしに壁紙をデフォルトに戻した。
それにしても、ピンクの部屋に一台だけある黒いノートパソコン・・・シュールだ・・・。

結局、休憩と言いつつノロノロと片付けを続けてしまったので5分後には手持ちぶさたになってしまった
「暇だ・・・」
とりあえず、インターネットの環境も整えたし、ネットでも見ようかな・・・。

―コンコン
「どうぞ」
パソコンのブラウザを起動したところでドアがノックされた。
入ってきたのは髪の長い女の子
「ご飯出来たから呼んできてって日向が」
身長は日向さんよりちょっと下くらいかな
「ありがとうございます・・・えっと・・・」

普通に応えたけれどこの子の名前知らないや
「優雨・・・柏木　優雨」
ちょっと警戒されてるんだな
「鷺宮　歌織です。よろしく御願いします」
そう言って僕は微笑んだ
「うん、よろしくね　歌織」
そう言って優雨さんは笑ってくれた。もしかして僕が真顔で冷めた印象だったからかな・・・

1階にある食堂に行くと
「3人だけですか？」
予想以上に少なかった、それも2年生が（自分を含めて）3人。
「新入生が入ってくるのは明日ですからね、それでも今年は3年生のお姉さまがいないので最上級生は私たちなんですよ」
にこやかに笑う日向さん
「そうなのですか・・・」
不安ではあるけれど、何とかなりそうだ・・・たぶん

一応自己紹介を済ませてあるので、正式な自己紹介は明日の入寮式で行うことになった。

第2話へ続く

第1話「憂鬱な姫君」（後書き）

作者「第1話「憂鬱な姫君」でした」
歌織「設定の自重してませんね」

作者「中央線とかねw」
※もちろん2次設定です公式にはこのような設定がありません。
歌織「そんな細かく設定して何がおもしろいんですか？」
作者「その手の設定にうるさい友人のため・・・」
歌織「苦労してるんだね」

作者「さて次回は始業式と入寮式位までかければいいかな」
歌織「という事は学院生活が始まってしまうのね・・・」
作者「そんなに憂鬱にならないでくれよ、俺が書きにくいw」
歌織「パターン的に速攻でばれる気がするわ」
作者「でももう君は口調が学院モードだね」

歌織「第3話「Ｕｌｔｒａｍａｒｉｎｅ　ｐｒｉｎｃｅｓｓ　ｓｅｃｒｅｔ（群青姫の秘密）」（仮第）」
作者「・・・それは桜の舞う４月の物語」

※５／２６追記
誤字がありましたので修正いたしました。

第2話「Ultramarine princess secret（群青姫の

作者「さて第2話ですが、今回の前書きアシスタントは宮藤　陽向さんです」
陽向「皆さんこんにちは、宮藤　陽向です」

作者「さて、今回のお話なのですが、長くなりすぎました・・・orz」
陽向「なので前編・後編に分けます」
作者「書いていると何故か長くなるんだよねおとボクっって」
陽向「それじゃあ作者さんはほかにもおとボク作品を作っていらっしゃると言うことですね」
作者「書いてるつーか書いてたかな、この作品になるまでの没のことね・・・・」
陽向「えーちょっと作者さんがトラウマモードに入ってしまったのでとりあえず本編をどうぞ！」

第2話「Ultramarine princess secret（群青姫の

朝、3人で朝食を摂った後、僕は春の穏やかな日差しと桜並木に見送られて乙女の園に・・・。

職員室と学院長室に行って今日の説明を受けた後、学院長室を出るとそこには

「待っていてくださったのですか？」

陽向さんと優雨さんだった。

「せっかく同じクラスになれたんですから、一緒に行きましょうよ」と言うことらしい

こうして僕は今年のクラスである2年F組へと向かった。

教室に入る前に僕はメガネをかけた。

顔の印象を変えるためでもあるけど、若干悪かった視力の補正用でもあるフレームレスのメガネだ。

もーやだ・・・入る前から鬱状態だ・・・。

それでも僕はあと2年ここで過ごす羽目になるのか・・・今更ながら鬱になってきた

「歌織・・・どうしたの？」

なんか、優雨さんにすっごく心配されてませんか？

「いえ、何でもありませんよ・・・ちょっと以前転校したときのことを思い出していただけです」

そう、僕が転校するのは1度や2度ではない・・・小学校は3年生までオックスフォード（イギリス）だったし、4年生からはフランクフルト（ドイツ）、中学ではヘルシンキ（フィンランド）だったし、日本に帰ってきたのは一昨年だし・・・。

僕らは陽向さん先頭で教室に入っていった。
一斉にこちらを向く人たち・・・。
・・・・何というか、静寂がこの教室を支配していた。
「なんてお美しい方なのでしょう・・・」
そんな言葉が一言聞こえた後は、何というか・・・黄色い悲鳴と言った方がいいのだろうか・・・まあ想像は出来ると思う。
転校初日は仕方がないことだとは思うけれど休み時間になれば、僕は質問攻めにあっていた。でも、そんなにいっぺんに質問されても、答えられないし・・・どーしてくれよう。
「少々用事を思い出しましたので少々失礼いたします」
こういって逃げるしかなかった。まあ購買部に教科書を取りに行くことになっていたのでそれを済ますために僕は席を立った。
その時・・・
「歌織さんは、面白い方ですね」
不意に声をかけられた。ハッと振り向くと僕の隣に座っていた人・・・歩美さんだったかな
「歩美さん・・・でしたっけ？そうかもしれませんね・・・私はちょっと偏った考えを持っていますから・・・」
優雅な人だ・・・そう思った。着飾るとかそう言う問題ではなく、人から出ているオーラがそう思わせているんだと思う。
「そうではありませんよ。それより購買部に行くのなら案内いたしますよ」
どう違うのだろうか・・・分からない・・・
「そうですか、実は私もどこに購買部があるのか存じ上げない物ですから」
この人はちょっと気をつけた方がいいのかもな
歩美さんと教室を出て僕たちは購買部へ
「私、人のイメージは色だと思っているのです。この学園の方はある意味似たり寄ったりですが・・・貴方はちょっと変わった色をしているのですね」

歩きながら歩美さんの話を聞いていた
「変わった色ですか？」
彼女は何か不思議な雰囲気を持っている。
「他の方はオレンジや暖色系が多いのですけれど・・・貴方は男性に多いブルー・・・それも珍しい群青色ですね」
ばれた！？いや・・・まてまて、ばれてはいないしそもそも今は３６０度どこをとっても男性という方がおかしいわけで・・・それどころかイメージでしかないわけだから、そっそんなに動揺することでは・・・。
「群青色ですか確かに私の瞳は群青色ですが・・・やはり分かる方には分かるのですね、確かに私は昔からお転婆ではありましたが」
仕方なく言い訳するしかない、いや半分は事実だね。
「そうなのですか？私にはそうは見えませんけれど」
「まあ、私はお転婆ではありましたが厳格な父の教育でお淑やかであり、お転婆でもあるという全くやっかいな人間になってしまったのです」
正確にはちょっと違うのだが・・・まあ当たらずとも遠からずだろうな。
「さて、ここですよ」

結局、僕は戻っても質問攻めにあった・・・。

ー放課後の寮の自室ー
つ・・・疲れた。
何が疲れたって？部活動の勧誘ですねちょっと活気ありすぎじゃないでしょうか・・・。

でも、収穫はあったかな
昨年のエルダーだった千早さん（僕の親戚）の妹だったと言う３年

生の方がいた。
昕　雅楽乃お姉さま、通称「御前」と慕われているらしい。
実は僕の編入前に千早さんに電話をもらっていて、僕のフォローを頼まれていたらしい。

「お姉さまから聞いていたとおりの方ですね、困ったことがあったら何でも相談していただいて結構ですよ、私はあなたの姉ですから」
雅楽乃お姉さまの言葉が僕の脳裏によみがえった・・・。
確かに雅楽乃お姉さまからすると自身のお姉さまの親戚で妹のような存在のように見られている訳だし、僕が呼ばないのはちょっと失礼に当たるし・・・。
それにしても名前＋お姉さまという組み合わせはどうも慣れないと思う。
そりゃ、慣れた方は問題だよな・・・だって僕は・・・。
ーコンコンー
「歌織ちゃん、いらっしゃいます？」
ノックの音、陽向さんだった。
「ひゃっ・・・はっはい！」
思わず素っ頓狂な声を上げてしまった
「どっどうかしましたか！？」
なんか変な誤解でも招いたかな・・・
「いえ・・・何でもありませんよ、何でも・・・」

そういって僕はドアを開けた。
「新入生の皆さんも集まりまったので、入寮式を始めますから降りてきてください」
そういえば今日がその入寮式だった
「分かりました」

そういって僕は食堂へ向かった。

第3話に続く

第2話「Ultramarine princess secret（群青姫の

作者「第2話Ultramarine princess secret前編でした」
歌織「皆さんこんにちは後書きアシスタントの歌織です」
陽向「ひどいですよ、今回のアシスタントは私じゃないんですか？」
歌織「作者さん、そこのところどうなんですか？私は調整室の方にいる雅楽乃お姉さまと優雨ちゃんに行け行けって言われてきちゃったんですよ」

作者「陽向はゲストだよ？」
陽向「そうなんですか！？（ガーン）」
歌織「手元の資料によると、前書きMC：作者&陽向、後書きMC：作者&歌織となっていますね」

作者「とりあえず、2話終了したけど、歌織さんはどうですか？学園生活とか」
歌織「そうね…すっごく疲れるわ…まだなれていないしね」
陽向「そうですか？とっても自然に皆さんとお話しされていましたけど」
歌織「そうかしら？、私はあまりに多い質問に心の中ではかなり動揺していましたよ・・・」

作者「ここでお知らせです」
歌織「えーっと作者多忙（リアルで受験です）のため更新スピードが落ちることがあります」
陽向「いつもより遅いペースで更新しておいてそれはないですよ作者さん・・・」
作者「酷くない？酷じゃない？俺だって・・・といいたいところだ

けど、ちょっとそんな事も行っていられないんですよ・・・その前に中間試験とか期末試験とかありますから、そしてもう1週間前というｗｗ」

作者「とりあえず第3話「Ｕｌｔｒａｍａｒｉｎｅ　ｐｒｉｎｃｅｓｓ　ｓｅｃｒｅｔ（群青姫の秘密）後編」」

陽向「秘密は言えませんか？」

歌織「言えませんね・・・だって話してしまったら秘密じゃないですから」

５／２９

※誤字を修正しました

第3話「Ultramarine princess secret（群青姫の

作者「遅くなりました・・・すいません＞＜；自分で書いていてどこが秘密なの？と思ったという・・・」
陽向「ちょっと2人のエルダーで私と優雨さんの性格勉強し直してきてくださいよ・・・」
作者「はーい・・・」

陽向「さて、邪魔な作者さんが消えたので今回のお話の紹介です」
作者「勝手に消すな！」
陽向「あー、なんか幻が・・・」
作者「陽向さん、出番削減と・・・メモメモ」
陽向「やだなぁ、冗談ですよ、冗談」
作者「気を取り直して今回は長い割に間延びした感ばりばりですが・・・とりあえず、どうぞ」

第3話「Ultramarrine princess secret（群青姫の

食堂に降りると1年生はもう揃ってしまっているようだった。
今年寮に入る下級生は3人
「これより平成23年年度聖應女学院女子寮入寮式を行います」
今年の寮監である陽向さんが入寮式の開始を宣言する。
「まず、自己紹介からね、私は今年の寮監を勤めることになった宮藤　陽向です、文芸部と水泳部に所属しています。じゃあ、次は優雨さん」
いきなり指名されてオロオロとする優雨さんだが
「えっと・・・私は柏木　優雨・・・園芸部にいる・・・じゃあ次は歌織」
唐突というか警戒気味というか・・・
「鷺宮　歌織と申します、私も今年から寮に入ることになった2年生です、私自身編入したてなので右も左もわからないこともありますが、よろしくお願いします」
2年生の自己紹介を終えて
「天城　真名です！趣味は絵です、あと歌舞伎が好きです、私のお父さん歌舞伎役者なのでその影響かな」
ちょっと長めの髪をサイドポニーにしている女の子が真名ちゃん
「雨宮・・・美？です・・・えっと・・・その・・・」
この娘・・・
僕は、思わずその子を抱きしめてしまった
「緊張・・・してるみたいね、大丈夫よ」
優しく、僕はその子を抱きしめていた
「ありがとうございます・・・」
それを見ていた陽向さんが
「お母さんみたい」
え・・・・

「そうですか・・・私は・・いえ、何でもありません」
雰囲気を察してくれたのか日向さんは最後の娘に自己紹介をするように言ってくれた
「佐々木　燐です、実は美海とは幼なじみで私がこの学院に誘いました、小学生からずっとなんで二人でいるときは結構普通なんですけど・・・」
なんというか・・・気まずいよ？
「とりあえず・・・寮の規則についての説明ね、寮の門限は・・・」
門限か・・・姉さんは9時過ぎるとめちゃくちゃ怒ったけど・・・
「特に設定されていませーん！」
はい？ない？何故？ないの？
「設定されていないのですか？」
思わず聞いてしまった・・・いくら生徒の自主性を尊重する学校だからってそんなのありですか・・・。
「まあ、社会的事情とかいろいろあって、一応22時までには帰ってきているのが望ましいっていうことになっているんです」
そうだよな・・・でも一応ってどんだけ生徒を信頼できるの・・・
「そなのですか・・・ちょっとびっくりです」
むしろ僕より1年生の方が驚いてしゃべれてないし。
「あと、近くにコンビニエンスストアーがあるんだけど、基本的に22時以降は利用しない方向でお願いします。それと、どうしてもコンビニエンスへ買い物に行く場合、22時以降は必ず二人以上で行って下さい。そして、淑女のたしなみとして、寝巻きやジャージ姿で買い物へ行くのは禁止なのです」
へーと感心していると真名ちゃんが
「じゃあ、例えば深夜にふと買い物に思いついた場合、誰も起きていなければ買い物は無理なんですね？」
僕はそんなに早寝ではないし深夜と言ってもそんなに遅いことはないだろうからなぁ。
「そうなりますね。そうならない様に準備は万端にするか、諦める

かしか無いですね」
「分かりました」
そう言いながらちょっと残念そうな顔する真名ちゃん・・・一人では出歩かないでほしいなとくに真名ちゃんは・・・
「後は『妹』決めだけですね！」
寮の規則ってそれだけ？マジで？
「とりあえず、誰の妹になりたいとか姉になりたいとかっている希望があれば」
そうですね、私は・・・って一人称が・・・僕だよな・・・ちょっと変な感じに染まりだした！？
「私・・・あの・・・その・・・歌織お姉さまの・・・妹になりたい・・・・です・・・・」
え？今なんて？最後のほうはかなり尻すぼみで分かりにくかったけど、今僕の妹になりたいって言ったよね？
「そっか～、美羽は歌織お姉さまがいいのか～♪」
うりうりとじゃれ合うように美海ちゃんのほっぺを突く燐ちゃん
「やめて・・・よ・・・恥ずかしい」
何だろうか・・・微笑ましい？
「美海がそう言ってくれるなら私は大歓迎よ。と言ってもみんなの意見も聞いて置かなくちゃね」
僕はいたずらっぽく言ってから陽向さんたちの方を見る
「私たちが美海ちゃんの恋を邪魔するとでも思います？」
恋って・・・・洒落になりませんよ陽向さん・・・
「それじゃあ、美海は歌織の妹で決定」
なんとずっと何も言わなかった優雨さんが決定宣言をするとは・・・
結局、美海は私の妹に、真名ちゃんは陽向さんの妹に、燐ちゃんは優雨さんの妹になりました。

「お邪魔・・・します」
部屋にきても緊張しているのか美海はカチカチだった
「そんなに緊張しないで、私まで緊張してしまいそうだわ」
うふふ・・・なんて笑うようになる自分にちょっと恐怖を抱いた僕だった
「はい、ごめんなさい・・・」
とりあえず紅茶でも入れるか・・・。
今日のお茶は・・・ちょっと美海も疲れているみたいだしグレープフルーツを入れてグレープフルーツミントティーにしようかな。
「はい、今日は疲れただろうからこれ飲んで、ちょっと酸っぱいかもしれないけれど体にはいいから」
そういって僕はちょっと冷たいグレープフルーツミントティーを美海に手渡した
「ありがとうございます・・・あ、おいしい」
よかった、ちょっと酸っぱすぎる&えぐかったかなって思ったけどそんな事は無いらしい
「そう?よかったわ」
何でだろうか・・・僕は美海を過去の自分と重ねている気がする。
彼に出会ってからだろうか、僕がこんな風に変わったのは。
「お姉さま?どうかしましたか?」
僕の秘密、誰も気にしないだろうけどね、僕は結構にするタイプだし。
「何でもないわ、ちょっと昔のことを思い出していただけだから」
結局そのあとは勉強を見てあげたりして過ごしたけど10時過ぎには眠くなってしまったようだったので僕は彼女を部屋まで連れて行き寝かしつけた。

「優しいんですね、歌織さんは」
美海の部屋を出たところで陽向さんに声をかけられた
「そうですか?私は実の姉がしてくれたように接しているつもりな

のですが・・・」
昔は忙しい両親に変わって姉さんが僕の面倒を見ていた。
そのときの姉さんはこんな風にしてくれたっけ。
「優しいお姉さまなんですね、でもちょっと過保護な感じが歌織さんですね」
過保護か・・・そうかもしれないな
「そうですかね」
僕は苦笑していた
「歌織さんって、聖母みたいな所があるんですね」
聖母って・・・ちょっと大げさ
「さて、そろそろ私たちも・・・」
陽向さんがそういいかけたとき
チャララ　チャララ　チャララララ～ン
僕の携帯だった
「すいません、私の携帯です」
ポケットにハンズフリー用のイヤフォンが入ってたかな
「はい、鷺宮です」
［歌織さん？］
千早さんだった
「お久しぶりです」
でも何でこんなバットタイミングに電話をしてくるの・・・
［びっくりしたよ、瑞穂さんから連絡をもらって電話したんだけど］
そういえばこの人には何も話してなかった・・・というか瑞穂さんに聞いていた話では昨年度のエルダーだったらしいじゃないですか・・・
「私は引っ込み思案な性格ですので、いかに昨年のエルダーといえど・・・その・・・」
もちろん忘れていただけだけど、ちょっと恥ずかしかったということもあ。
［そう？僕にはそんなようには見えないけど］

「千早さんはちょっとデリカシーがないのではないですか？」
「そんな事は無いと思うけどなぁ・・・」
「冗談です、でも敏感なんですよ、私も・・・あなたと同じように」
「そっか、じゃあがんばってね。今度遊びに行くよ、おやすみなさい」
「はい、おやすみなさい」
ちょっときつく当たりすぎてしまった・・・そりゃ1年間女装して女学院に通う羽目になった親戚が二人もいるのだ・・・ナーバスにもなる。
「千早お姉さまだったんですか？」
そういえば、僕が鏑木の親戚であることや、歴代エルダーの何人かと交流があることを全く話してなかった。
「ええ、一応私の親戚・・・です・・」
そうだ、去年も陽向さんがこっち（女子寮）に居たなら知ってるよな
「そうだったんですか！？言ってくれればいいのに」
「そうはいっても、私はエルダーの親戚と言うことで特別扱いはしてほしくないのです。それに・・で別の意味で特別扱いされますので」
あ、といった感じで口をつぐんでしまった陽向さん
ちょっといいすぎたな・・・
「もし訳ありません、ちょっと自爆しました」

そう、特別視されるのは何しろ容姿が容姿だし・・・日本人だけど。
「そんな事ないですよ、歌織さんは歌織さんです」
「そうですよね・・・こんな所美海には見せられないかも」
そのあとは二人でちょっとお茶を飲んで寝ることにした。

第3話「Ultramarine princess secret（群青姫の秘密）」

作者「第3話「Ultramarine princess secret（群青姫の秘密）後編でした」
香織理「ところで私はいつ出られるの？」
歌織「香織理お姉さま！？」
作者「本日のゲストは神近香織理さんです！」
歌織「名前が一緒・・・」

作者「ところで「かおり」さん」
歌織&香織理「はい？」
作者「あ、鷺宮さん」
歌織「私ですね、なんですか？」
作者「千早さんとの電話は実は要約したんだけどほかに何を話したの？」
歌織「ちょっと日頃の仕返し・・・じゃなくてちょっと・・・すいませんノーコメントで・・・」
香織理「あらあら、じゃあちょっと千早には言っておかなくてはいけないわねぇ」
作者「恋人に言われると手も足も出ないんでしょうか？どう思いますか？歌織さん」
歌織「知りませんよ・・・」

作者「と言うことで次回第4話「歌織お姉さまのお姉さま（エルダー）」（仮題）」

歌織「そんな・・・お姉さま・・・だめですよ・・・」
香織理「いいじゃない・・・別に何か問題があるの？」
歌織「私は・・・」

作者「そこの二人！ゲーム機のカメラで撮った写真を加工して変顔にして遊んでるんじゃない！」

番外編「歌織の秘密」（前書き）

※これは歌織が聖應女学院に転校する前のお話、歌織の友人片岡君の回想です。カメラ・バイクの話が多数出てきますがよく分からないのは基本的にはスルー推奨です。

番外編「歌織の秘密」

今更になってこの話を思い出すのはいささか歌織にとって悪いなと思いつつ、この場所に来ると思い出してしまう。

半年前、まだ俺と歌織が男子校でバカやっていたとき・・・。
美術の課題で湖の写真を撮ってこいというものがあった。
それをこなしに山梨県まで行ってきたのだが・・・もしかしたらそこが歌織にとってのターニングポイントだったのかな。

「どーしようか？夕日の撮影ポイントでも狙う？」
高速道路の通行止めにはまってしまい、湖に到着したのはもう日が暮れる頃という。
「どーすっかなぁ・・・おまえのはリモートレリーズだからいいとして俺にはそんな持ち合わせないから、３脚つかってセルフタイマーかな」
歌織は苦笑しながらバイクに三脚を積む
「いや、３脚で普通にとれるでしょ」
もうすぐ暗くなるしテント張ったら出発

結局納得いく写真は撮れずじまいだった。

翌日・・・忘れたい・・・そんな日だった
俺の朝はちょっと早かった
「寒い・・・」
１０月だというのに朝の気温は手元の温度計（歌織がバイクに装着している）で４度を下回ったまま・・・。
ちなみに俺のバイクの鍵に付けている温度計（たしか７８円）はずっと１５度を指したまま・・・

たき火して少し暖まったところで歌織が起きてきた
「おはよう、拓也は早いね」
白い息を弾ませながら歌織が俺の所にきた
「ちょっと、微速度動画を撮りたくてね」
そういいつつ俺はカメラを三脚から外す
「Ｅ－３０じゃあ動画は撮れないよね？Ｄ３００でも動画は撮影できないし」
確かに俺のカメラは動画はサポートしてないが
「はいはい、一本とられました、」
俺は三脚をたたんで
「とりあえず温泉にでもつかってから今日の撮影ポイント探すか」
俺がこのときこういわなければもしかしたら・・・いや遅かれ早かれ分かるか。

で
キャンプ場近くの温泉
「これどう思う？」
唐突に聞かれたが一瞬思考が停止した
「さあ、知らん」
困ったような顔をする歌織
「驚いてる？」
行くまでもないだろ
「驚いてるよ、俺が今すぐにオコジョの兄貴と仮契約して魔法少女になるかもしれないくらいに」
内心驚いてるそりゃ親友が何故か二つの・・・
「いや、いくら何でも少女にはならないよ」
冷静な突っ込み・・・恐れ入るよ
「で？どうしてこうなった？」
そう言うしかなかった

「わかんない」

結局、その日のうちに桜さんに連絡後に歌織は美澄製薬系列の病院に入院した。

数日後

「それで、勝手に胸からパッドが出てきた感想は？」

俺が病室に入って第一声だ

「びっくりしてる・・・」

元々声は高かったから、あんまり印象も変わらないのか

「だろうな、俺も一夜にして完全に性別が入れ替わったらそう思うが、むしろこっちのほうが自ＺＥ・・・ぐは・・・」

「何だって？」

むしろこっちの方が自然と言いかけて歌織に蹴られた

「いや、戯れ言だ・・・しかし、学校じゃ大変なことになってるぞ」

歌織が入院して数日、ずっと質問攻めだったからな

「迷惑かけてるね、ごめん」

俯いてしまう歌織

「おまえが気にする必要はないって」

翌年４月中旬某日

あれから半年、聖應に転校した歌織は学内でまぼろしの美少女なるあだ名をちょうだいしていた。

とある休日の昼下がりに珍しく歌織から携帯に電話が来た。

「はい、片岡です」

[鷺宮ですが拓也？]

聖應に転入して美澄の姓ではなく曾祖母の旧姓

「歌織かじゃないか、どうかした？」

[ちょっとね、気になる噂を耳にしたから電話したの]

「へーどんな噂？」
［うん、統合のこと］
「あちゃー・・・そこまで広まってたか」
［女の子の噂は広まるのが早いんだよ］
「今年の９月から仮統合が始まる、統合先は春風女子学院・・・」
［駅の反対側にあるお嬢様学校じゃないか］
「俺としては、徒歩５分がバイクで１５分になるのは不満だ」
［それは仕方ないと思うしかないし、バイク通学と止めてもらえただけでも良しとしようよ・・・あーそっか、いつも遅刻ぎりぎりだからか］
「そうだよ、でもまあ平気だろ」
［へー、楽観的なところが珍しいね、なんか心境の変化？］
「まあな、とりあえず、おまえも頑張れ、俺も似たような状況になりかけてるけどテストクラスにならなければバイク通学は回避できる」

その数ヶ月後に俺はそのテストクラスがらみで大変なことになるのはまた別のお話。

番外編「歌織の秘密」（後書き）

作者「番外編ですね」
拓也「知ってます」
作者「前々から書こうとは思っていたのですが・・・」
拓也「にしてもスローペースでしたね、プロローグがコレになるはずがいつの間にか番外編に・・・」
作者「つーか完全に女の子なんだね」
拓也「原因は不明って聞いてますよ」
作者「マジで？」
拓也「まあホルモンバランスと遺伝子とが複雑に云々というのを聞かされて半分寝てましたｗｗ」

作者「実は録画してた神のみぞ知る世界を皆がらだったから「で」とかそう言うシーンで勝手に・・・」
拓也「分からなくもないがどんだけ見てなかったの？」
作者「えーっと1期半分と2期・・・」

拓也「さて次回はちゃんとした本編の更新をできるようにさせたいと思います」

第４話「歌織お姉さまのお姉さま（エルダー）」（前編）（前書き）

作者「またしても前編・後編に分けなければ・・・」
陽向「作者さんの小説って基本的に長いよね？」
作者「まあ、原作やってるときも結構長いなぁなんて感じてたし・・・」

陽向「今回は比較的短い前編・後編になりそうだし」
作者「じゃあまたあとができ」

第４話「歌織お姉さまのお姉さま（エルダー）」（前編）

５月、それはもう少しで梅雨と言う季節、だけど、ここは・・・熱に浮かされる季節。
そう、あと１ヶ月で・・・６月末にエルダーが決まる。

その話をするにはもうちょっと前、４月の半ばを過ぎたあたりだったかな。
そのときはまだ、これから起こる事を予見できるなんて思っていなかった。

ちょうど部活の勧誘活動が始まったころのこと
入学式から１週間で部活動の勧誘が解禁になるので桜並木は新入生を勧誘する上級生でいっぱいになる。
「今年は歌織ちゃんも気をつけないといけないね」
放課後、部活に行く準備中の陽向ちゃんが僕に言った。
「陽向ちゃんそれはどういう・・・あー、そういう事ね」
親しくなるにつれて敬語で話すのが面倒になったのかいつの間にか「ちゃん」付けで呼び合うようになった。
「歌織ちゃんは千早お姉さまを超える勢いで校内では人気を獲得してるんだから、気をつけないとね」
確かに、ちょっと容姿的な意味で目立つし、「御前」といわれる雅楽乃お姉さまと一緒にいることが多いし適当に私に意見を求めてくるお姉さまからすると結構信頼されているのかな？と思う。

「３－Ｃの昕と申しますが、鷺宮　歌織さんをお願いできますか？」
タイムリーに雅楽乃お姉さまがきてしまった・・・こうなるともう止められない・・・
「はっはい・・・かっかっか・・・歌織さん、雅楽乃お姉さまがお

見えですよ・・・」
入学してから何度もみているけれども、この光景を見慣れてしまったら終わりだなと思う。
「はい、ありがとうございます、綾乃さん」
受付嬢の綾乃さんに挨拶をして
「お姉さま、困りますよ・・・私がお姉さまの教室に行かなければならないのに、これでは私、皆さんに嫌われてしまいます」
ちょっと申し訳ないなと思っているんだけど、今日は掃除当番だったし・・・
「あらあら、でも私は早く歌織の顔を見たかったのですよ」
ちょっといつも弄られているので仕返しをしようと思っていたが
「もう、そんなことでだまされませんからね・・・でもちょっとうれしかったです」
逆に弄られた・・・。

結局、部員獲得戦に巻き込まれないための手段としてお姉さまが用意したのが
「華道部のコーナーで勧誘していれば恐らくは気がつかれないのではない？」
しかし、さすがは華道部部長の「御前」こと雅楽乃お姉さま
「全然声をかけられない、むしろ華道部の部員だと思われている」
確かに私は雅楽乃お姉さまに誘われて華道部のある水曜日と木曜日は華道部にほぼ入り浸っているし、ド素人だしあまり上手くはいかないけれど楽しかった
淡雪お姉さまからは
「もう華道部に入部しちゃえばいいのに」
とも言われてしまった

前置きはこのくらいにして・・・え？部活？ちゃんと入部しましたよ、華道部と写真部にね。

入部前に華道部の勧誘に出ていたわたｓ・・・僕は一躍時の人に・・・
と言うのも前年度のエルダーの妹（と本人が公言）の雅楽乃お姉さまと淡雪お姉さまの中で唯一の２年生・・・ほかの部員の方？勧誘に出ていますよ・・
「目立つんです」よ自分の身体的特徴をあーだこーだと今更ごねる気はないけどさ、銀髪＋ショートカット＋欧州系の白い肌＝淡雪お姉さま並に目立っております。
むしろ僕目当てに見物にきている方のほうがが多いのでしょうね・・・
結局終始僕は注目の的だった。

５月もあと１日で終了という時
雅楽乃お姉さまとの昼食中
「そう、じゃあ歌織は大変だったのね」
ちょっと雅楽乃お姉さまと世間話中
「笑い事ではありませんよ、私は顔から火が出てしまいそうだったのですよ」
ちょっと華道部の時に起こった失敗談を話しているとき

「あの・・・雅楽乃お姉さま」
２人組の１年生の子に声をかけられた。その子はかなり緊張した面持ちで何かを決意したようなそんな表情だった。
カフェテリアの中が一瞬にして静かになった
「私、お姉さまに投票させていただきますね・・・」
最後はかなり尻すぼみになったがこれは・・・エルダー選挙の投票宣言！？
「あ・・・ありがとうございます」
お姉さまは一瞬戸惑ったようにしたがすぐにいつもの調子で微笑んだ

「あの、群青の君・・・」
もう一人の1年生の子群青の君って・・・僕？
「私ですか？」
全く知らないぞ、そんなあだ名・・・じゃない二つ名なんて・・・
「私、群青の君に投票させていただきますね」
はい？今なんて？何？間違い投票宣言？
「えぇと、ありがとうございます」
とりあえず、微笑んでおく・・・いやダメだよ、2年生だよ僕は、
体は女の子でも心は男だからね。

驚いたことに「群青の君」と言う二つ名は僕の知らないところで物
凄い勢いで広がっていた。
その発端は、先週の体育の授業だった。
陽向さんの話ではバドミントンの授業が原因らしい・・・
たしかシングルスで対戦したとき
「今のシャトル、打ち返せたよね？」
そのとき対戦していたのは秋本綾乃さん、2年C組の受付嬢、そし
てバドミントン部のエース。
「そんな事はないと思うのですが、どうしてそうお思いになるので
すか？」
確かに手は抜いていた、でもかなりの勢いのサーブだったし
「目で追っていたし、体の力の流れが反射神経を押さえたように見
えたので」
生粋のスポーツマンなのかな？鋭い・・・たしかに
「踏み込むのを躊躇はしましたが、それはサーブスピードが高かっ
たので・・・」
言い訳・・・ダメかな？
「そうですか、それでも・・・次は本気を出していただけますね？」
結局、二人ですごい勢いでシャトルの打ち合いをしていた・・・

そのとき使用していたラケットの色はブルー、僕の瞳の色は群青色・・・由来は結構身近なものでした。

※群青色とは
群青は本来瑠璃（ラピスラズリ）を原料とする青色顔料のことでラピスラズリの主鉱物はラズライト。古くから西洋画などに使用されている。ヨーロッパへはアフガニスタンから西アジアを経てもたらされたため、当初は大変に高価な貴重品であり、純金と等価もしくはそれ以上の価値で流通していたという。

そう言えば合同で体育館を使用していたのは真名ちゃんのクラスだったかな・・・。

話を戻すけど、結局その日を境に僕や雅楽乃お姉さまは投票宣言を受けることが多かった。
もちろん雅楽乃お姉さまの比ではないにせよ相当な数だ。
「是非投票させていただきますね」
主に下級生から受けている気がするよ・・・。
基本的に笑顔で受け答えするけど内心もうやめてほしい・・・

その一方で僕は別の噂も広がっていた。
それは「僕が美海に紅茶の入れ方を教えている」という物や「燐ちゃんに怖い話を聞かされた晩に一緒に寝てあげた」と言う物。
たしかにさっきあげた二つの噂は本当だけど、燐ちゃんか真名ちゃんあたりだろうな。

そのせいで急速に噂が広がり・・・
第５話へ続く

第４話「歌織お姉さまのお姉さま（エルダー）」（前編）（後書き）

作者「さて第４話「歌織お姉さまのお姉さま（エルダー）」（前編）でした」
歌織「結局このパターンなのね・・・」

作者「書いているとさすがにキャラを忘れそうになる事って多いですよね・・・そのときは原作を鑑賞します」
歌織「小説だったっけ？」
作者「気軽に読めるのは漫画と小説だね、ゲームは・・・インストールしてあるＰＣ動かすのがだりーよ・・・」
歌織「作者の部屋には何台ＰＣあるの！？」
作者「１．２．３・・・いっぱい」
歌織「さいですか・・・」

作者「ところで最近歌織の心情を書いてると一人称を「私」にしてしまいそうになるんだよなぁ」
歌織「いーですよ・・・どうせ僕なんて・・・男女とか言われてましたから・・・」
作者「あーごめんごめん。気をつけるから、機嫌直してよ」
雅楽乃「あら、作者さんも大変なのですね」
作者「あ、雅楽乃さんどーも、お連れの方は・・・まさか・・・」
？？「今年は誰がエルダーになるのかしらね」
歌織「あなたは！」

？？「次回乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第５話「歌織お姉さまのお姉さま（エルダー）」（後編）それはまだ梅雨の明けきらない６月の物語」
作者「一番いいところ持って行きましたね・・・」

歌織「まさか・・・本当に・・・・」

第5話「歌織お姉さまのお姉さま（エルダー）」（後編）（前書き）

作者「今回はちょっと失敗したなーと思ってる作者です」
陽向「アシスタントの陽向です！」

作者「いや、なんかさ無駄に変なこと書きすぎた気がするよ、もっと簡潔に終わらせたかった」
陽向「でも、はじめからもう言う流れだったじゃないですか。それに作者さんは基本的に大事なところは書かない人だし」
作者「それ褒めてんの？」
陽向「どーでしょうね♪」

作者「とりあえず第5話「歌織お姉さまのお姉さま（エルダー）」（後編）をご覧ください、どうぞ！」

第5話「歌織お姉さまのお姉さま（エルダー）」（後編）

６月中旬の日曜日
「歌織ちゃん、電話ですよ・・・外国から」
陽向ちゃんに呼ばれて僕は電話を取りに行った
「陽向ちゃん、ありがとう」
外国からかかってくる予定はないんだけど・・・
「ＹＥＳ？」
［Ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ，　ｐｒｉｎｃｅｓｓ　Ｋａｏｒｉ．Ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　Ｓａｋｕｎｏ　ａｎｄ　ｈａｖｅ　ｙｏｕｒ　ｓｅｃｒｅｔａｒｙ　ｏｆ　ｏｕｒ　ｇｒａｎｄｆａｔｈｅｒ］（おはようございます、歌織お嬢様。あなた様のお爺さまの秘書をしております咲乃ともうします）
「咲乃さんどうしたんですか？それも英語でなんて」
［お久しぶりです、歌織お嬢様。今回は折り入ってお願いがございまして、お時間よろしいでしょうか？］
「Ｗｈａｔ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｕｒｇｅｎｃｙ？」（緊急の用件ですか？）
［はい、実は・・・］
歌織Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

陽向Ｓｉｄｅ　ｉｎ
「Ｗｅｌｌ，　ｔｈｉｎｋ．　Ｂｙｅ　？　？　？　？」（そうね、考えとく・・・じゃあね）
歌織ちゃんはそういって電話を置いた
「凄いんだね、歌織ちゃん」
そういうと歌織ちゃんは苦笑しながら
「そうでもないよ、それに・・・ちょっと、お爺様から怒られてしまいました」

さっきの電話はお爺様からだったんだ・・・あれ？でも確か女の人の声だったような
「毎年7月のあたまになると祖父の家に泊まりに行くんだけど、今年は寮生活だし行かないと決めていたのですが、お爺様に「3連休もあるし寮生の方が来ても問題はないから7月には帰ってきなさいと」言われてしまいました」
苦笑する歌織ちゃん
「厳しい方なんだね・・・」
私はそれしか言えなかった。
それはただ単に気の利いた言葉が見つからなかったと言うよりは歌織ちゃんが何も言ってほしくなさそうだったから。
陽向Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

歌織Ｓｉｄｅ　ｉｎ
その夜、相談事があり拓也に電話した
［はい、片岡ですが］
「拓也、久しぶり」
［あぁ、久しぶりだな、どうしたんだ？］
「あのさ、この前のメールにも書いたんだけど・・・」
［エルダーシスターの話？］
「うん、やっぱり2年だし辞退するよ」
［まあ普通は辞退するな、何かほかに気になることでも？］
「僕が何か言う前に逃げられるって事は向こうも分かっててやってる気がするよ」
そう、僕は投票宣言をされるのだがその後すぐにその子は立ち去ってしまう
［メールでも言ってたな］
「まあ近いうちにちゃんとケリを付けるよ」
［思い切った行動でも起こすのか？］
「うん、明日・・・雅楽乃お姉さまに投票宣言する」

［なるほどね］

翌日の昼食時
「2年C組の鷺宮　歌織と申しますが、昕　雅楽乃お姉さまと冷泉
淡雪お姉さまをお願いできますでしょうか？」
雅楽乃お姉さまと淡雪お姉さまと僕でテーブルを囲み食事をとる・・
・食事がのどを通らない・・・緊張ってこういう事なのか・・・改
めて実感した。

「雅楽乃お姉さま、お話があります」
僕は席を立って雅楽乃お姉さまの真正面に立った
「はい」
僕は跪いて雅楽乃お姉さまを見上げる
何事かと生徒が何人か集まってくる
「私、２－C鷺宮　歌織は昕　雅楽乃お姉さまにエルダー選挙で投
票することを宣言いたします！」
みんなが注目する中での投票宣言

この作戦は功を奏した、と言ってもいいかもしれない。
一応宣言は減った減った、それでもまだ学院の雰囲気が良くない方
向に向いている気がする
「今日の歌織は浮かない顔をしているわね」
今が華道部の活動中だったことに今更気がつく僕
「今日の私は、すべてにおいて迷っている気がいたします・・・」
僕は雅楽乃お姉さまにポツポツと胸の内を話していた
「答えは見つかりそうですか？」
僕の話を聞き終えたお姉さまはそう聞いた

「見つけたい・・・ですね」
寮に戻っても答えは出る気配がない。
気分転換にゲームでもと思い携帯ゲーム機で遊んでみたけど特に何も・・・
「お姉さま？」
僕が顔を上げると美海が紅茶を持って不思議そうな顔をしていた。
「どうしたの？美海」
僕は携帯ゲーム機を置いて問いかけた
「お姉さまがすごく難しそうなこと考えている感じがしたから・・・声かけにくくって」
そっか・・・そんな顔してたんだ
「ごめんなさいね、ちょっと答えの見つからないかもしれない問題があったものだから」
「答えのない問題ってあるの？」
少し考えたあと
「もし、今ここで私が理由も告げずにここ（聖應）をやめたとするわね、美海はその理由を聞きたいけれども、その前に私がどこかへ行ってしまったら、美海にはその理由が分かる？」
分かる訳のない無理難題ではあるけれどそれが答えのない問題
「それは・・・困る」
そう言いながら僕の服をつかんできた
「大丈夫よ、私はそんな事できないから」
君が僕をそうやってしまってくれるうちは、僕は彼女の姉として精一杯のことをするべきだ。
「ほんと？」
何でここで涙目？
「うん」
その夜、僕は美海の頭を撫でていた。

翌日
「おはようございます、歌織さん」
翌日教室に行くと歩美さんが声をかけてきた
「おはようございます、歩美さん」
その後は授業の復習の話題などを話したけど

「歌織さんは最近、雰囲気が変わられましたね」
「そうでしょうか？」
「えぇ、最初は雰囲気が鋭い刃物のようでしたけれど、今ではそれが嘘のようです」
「そ・・・そうですか・・・」
うれしいのやら悲しいのやら
「歌織さん、おっはよー」
振り向くと目の前には・・・レンズ？
「何ですか・・・その砲弾レンズは・・・」
僕に向けられていたのは望遠レンズ、それも巨大な
「いやだなー、コレは望遠レンズだよ」
ニコニコしながらレンズをしまう愛理さん
「それは見れば分かりますよ」
あのサイズは持つのもつらいと聞くけど・・・
「今日は部活だって事忘れてないよね？」
今宮愛理さん、僕が所属するもう一つの部活写真部の部長さんだ
「大丈夫です、ちゃんとカメラも持ってきました」
と言っても僕のカメラは２００６年製デジイチ＋姉からのお下がりレンズ。
基本的に結構前のデジカメと言ったレベル。
「ニコンですね」
いつの間にか愛理さんが僕のカメラを引っ張り出していた・・・
「基本的に姉のお下がりです」
しかし、この人はいったいどこから現れるんだろうか？

そう言えば明日は・・・

あえてあの話題を出さないようにしていた。
投票宣言のあと逃げるように行ってしまうのは僕が2年だから？
その答えが今日出る。

もちろんエルダーシスターの参加資格は「聖應女学院の3年生」である
僕は2年生、そして転校生、目立つ要素としては十二分にある。
放課後は大変なことになるだろうな・・・なんて思っていたら
風邪を引きました・・・。
「ごめんなさいね、美海」
熱は38．8度、低くはない、もちろん微熱なら学校に行くけど
「気にしないで・・・」
美海は風邪をうつすといけないと言うことで最低限のことだしけてもらい学校に行ってもらった。結局行為の先生に往診にきてもらい
驚異日には学校を休んで安静にしていろというお達しが・・・。
「何というか・・・情けない」
実際僕の不殺生が生んだ結果だしね・・・まさか机で落ちるとは思いもしなかった。

ゲームでも・・・いやダメだよ、ダメダメ

今僕は寝ることが一番の・・・仕事・・・。

それから何時間かたった頃
ピ・・ピピ・ピピピ・ピピピ・・
「携帯？」
ロックを解除して通話ボタンを押す

「はい、歌織です」
時刻は3時４５分を過ぎたあたり・・・ついでに体温も測っておこう・・・
［歌織ちゃん？大変だよ！！］
この声は・・・陽向ちゃん？
「どうしたの？そんなに大声で」
［いまエルダー選挙の結果が発表されたんだけど・・・・］
「だけど？」
［落ち着いて聞いてね］
「はい」
［投票の結果、トップが雅楽乃お姉さま７２％、次に・・・歌織ちゃん２５％・・・以下２０％以下なの］
今なんと？２５％？何それ
「はい？２５％？」
［熱が引いていたらでいいんだけど・・・すぐにきてもらえる？］
３７度２分・・・一応微熱程度にはなったか
「行きます」
それだけ言うと僕は電話を切った
素早く着替えて、携帯、生徒証ｏｋ
靴を履いて寮から学院まで全力で走り出した

まったく、何で・・・あ！そう言えば僕今日休んだから投票してないや・・・何というか僕ってドジ・・・

寮と学校は近くだ
歩いて５分程度、走れば２～３分で到着する
「ハァ…ハァ…」
体力が落ちたかな・・・
ドアを開けるとそこには・・・

ほぼ全校生徒が居るのではないかと言うほどの生徒

「歌織ちゃん！」
陽向ちゃんだった
「走って・・・来ちゃいました・・・」
肩で息をしながら僕は答えた
「無茶したらダメだよ」
苦笑いしながら言う陽向ちゃん
「でも、来ないといけませんよね？」
僕はそう言いながら壇上に上がる
「お姉さま・・・ご迷惑をおかけして申し訳ありません」
僕はそう言って頭を下げた
「歌織、頭を上げて」
お姉さまは僕にそう言った
「私は、少し期待していたのかもしれません・・・」
それは聞きたくなかったと言った方がいいのか、お姉さまも期待していたという事実
「でも私にはその資格がありません。マイクを・・・お貸しいただけますか？」
担任の梶浦先生がマイクを渡してくれた
「そもそも私がこの場に立っていることを許されない人間です、そんな私に発言の機会を与えてくださり本当に感謝しています」
言うんだ、ちゃんと僕の意志を
「私は・・・敬愛する昕雅楽乃お姉さまに、私が獲得したすべての票を捧げます」
そう言って僕はお姉さまの手を取り口づけをした。
「鷺宮　歌織様から昕　雅楽乃様へ票の譲渡が行われました。これにより７５％以上の票を獲得した事になりますので本年度のエルダーが決定いたしました」
それを聞いた僕は思いっきり脱力していた。

まずいな、微熱に下がったのがぶり返してきたのか・・・ちょっと
もう限界・・だ・・
薄れゆく意識の中で僕はそう思った。
第６話へ続く

第5話「歌織お姉さまのお姉さま（エルダー）」（後編）（後書き）

歌織「ところで」
作者「はいはい。何ですか？」
歌織「前回の後書きに出てきた方はいったいいつ登場するのですか？」
作者「第6話からです・・・」
歌織「まさか・・・ゲストに呼ぶ順番間違えたとか？」
作者「いや、そのまさかです」

作者「さて今回はちょっと違うあとがきです。題して歌織先生の課外授業！」
歌織「なんか言い方が卑猥・・・」
作者「これから紅茶にはちょっと厳しい歌織先生に紅茶のゴールデンルールについて授業をしてもらいます」
歌織「何それ聞いてないよ」
調整室にいる優雨が「とりあえずアドリブでなんかネタやって@作者」というカンペを出していた

歌織「まあいいわ・・・紅茶のゴールデンルールはだいたい3つね」
1：水は汲みたての軟水を使用するのがよいでしょう
2：鉄分を含んだポッドは避けましょう（緑茶用の急須でもよい）
3：カップの内側は白いものを使用しましょう
歌織「これが紅茶のゴールデンルールね、これだけでも普段と違った紅茶が飲めるはずよ」
作者「以上、歌織先生の課外授業でした！」

歌織「さて次回は聖應女学院女子寮「櫻館」にあの人たちが遊びに来る！」

作者「突然の訪問者に戸惑う一同・・・そして迫り来る魔の手・・・」

歌織「次回乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第６話「休日綺想曲」（前編）」

作者「それはあまりにも厳しい妹としての定めなのか・・・」

歌織「待って、実は私・・・あなたに伝えなければいけない事が・・・」

第6話「休日綺想曲」（前編）（前書き）

作者「長くなりすぎました」
陽向「なので今回は特別に前編・中編・後編の3パートに分かれることになりました」
作者「いや、前回の過剰宣伝はやばかった・・・」
陽向「戸惑っていたのは歌織さんだけでしたからね、でも驚きですよ歌織さんのおｎ・・モガ！？」
作者「はーいネタバレ厳禁！と言うわけでとりあえず本編をどうぞ」

第6話「休日綺想曲」（前編）

7月のとある土曜日、なんとこの時期に珍しく新しい寮生が来るそうだ
まあ僕の知り合いなのだけれど・・・
「お疲れ様です、史さん」
千早さんの侍女で聖應女学院3年生
その日は7月とはいえとうに気温が３０度を超えてしまい歴史的な猛暑日となっていた。

翌日

「はい、聖應女学院女子寮です」
［歌織ちゃん？瑞穂です］
「例の件ですか？」
［ええ、今度の連休に卒業生がそちらに集まることになっていますよね？］
「はい、えっと参加人数の確認ですか？」
［そうなの、私と貴子さん、紫苑さん、まりや、圭さん、美智子さん、奏ちゃん、由佳里ちゃん、薫子ちゃん、千早さん、香織理ちゃん、初音ちゃん・・・あとね私のお姉さま・・・］
「１３人ですね。こちらは１０人なので合計２３人になります。そうなりますと各部屋２人から３人で使用していただくことになりますね」
使用可能な部屋は１１部屋とする。
［となると部屋割りは・・・］
「こちらで適当に決めてしまってもよいのですが・・・とりあえず瑞穂さんと貴子さん、千早さんと香織理さん、圭さんと美智子さんは相部屋確定です」

［あははは・・・ごめんね］
「気にしないでください、それに女の子というのはこういうのも好きな物ですよ」
［君は男でしょう・・・］
「人間観察のたまものですよお姉さま♪」
結局その後僕は自己嫌悪に陥ることとなったのは言うまでもない

月曜日、僕は前々から思っていた疑問を綾乃さんに聞いてみることにした。
「ところで綾乃さん、どうやったらバドミントンで相手の手前で野球のスライダーのように落ちるショットができるのですか？」
通常バドミントンで使用するのはシャトルである。テニスのようにボールならば回転のかけ方次第でどんな方向にも曲げられるのだけれど・・・
「あれは・・・私にも分からないんですよ」
まぶしい笑顔で答えても・・・
「分からない？」
いやいや、どんな魔球？手元までスピードが衰えないシャトルなんて聞いたこと無いよ！
※通常シャトルは羽の空気抵抗でスピードが落ちるようになっています。
「なんとなく、ユーバーショット１号と命名しているのですけれど」
※バドミントン女子にはユーバー杯という国別大会がある。ちなみに２０１０年の優勝国は韓国。男子にも同じような国別大会がありトマス杯という（２０１０年優勝国は中国）。
「ユーバーの星でも目指しているんですか・・・あなたは」
結局綾乃さんから原理は聞けなかった・・・。
それにしても綾乃さんはバドミントンの試合と普段都でギャップの大きい人だった。

普段は普通にお嬢様と言う印象、試合中は・・・言い方は悪いが獲物を狙う鷹のような人・・・。

その日の夕方
寮の掲示板にこんな紙が貼られていた。
僕の感想？何というかネーミングセンスが行方不明な上に変な字体・・・。

「夏の聖應ＯＧ合宿＋」
※エルダーには＃
ＯＧ参加者（敬称略ＯＧ代表以外アイウエオ順）
・宮小路　瑞穂（ＯＧ代表）＃
・厳島　貴子
・上岡　由佳里
・神近　香織理
・妃宮　千早　＃
・十条　紫苑
・周防院　奏　＃
・小鳥遊　圭
・高根　美智子
・七々原　薫子
・藤本　椿
・御門　まりや
・皆瀬　初音
学生参加者（敬称略）
・宮藤　陽向（学生代表）
・柏木　優雨
・鷺宮　歌織
・度會　史
・天城　真名
・雨宮　美海

・佐々木　燐
・ケイリ・グランセリウス
・冷泉　淡雪
・昕　雅楽乃　＃

うわ・・・学生参加者の欄手抜きだ・・・アイウエオ順になってないし・・・

「あれ？歌織どうしたの」
優雨ちゃんだった
「ちょっと手抜きに対して絶望してただけ・・・気にしないで」
優雨ちゃんは例の張り紙を見ると
「これ、陽向が書いてた・・・」
パソコンで書かれたその張り紙の字体はたぶんＡＲマッチ体Ｂだな・・・
※Ｗｉｎｄｏｗｓ版　ＴｒｕｅＴｙｐｅフォントのこと

ピンポーン※インターホンの音
「はい」
ドアの外には・・・ごめん閉めても良いよね？
「ちょっと！何で閉めるのよ！！」
姉さんが立っていた・・・
「幻ならすぐに消えて・・・普通に誰か来た事になって・・・」

面倒だったので外で話すことにしました・・・
「ちょっとぉ！そんなに会いたくなかった？」
「だって姉さんが来るといろいろ面倒なことになるんだもん・・・だいたい今日は何できたの？電車？」
いや無いな・・・姉さんが仕事以外で鉄道に乗るなんてあり得ない・・・。

「アフリカツインだよ」
※歌織の姉が使用するアフリカツインは本田技研工業が過去に製造販売していた７５０ｃｃのオートバイのこと。ちなみに乗り心地はとても快適。
「仕方ないですね・・・」
はじめ分かっていたようなものだけど・・・

で
「鷺宮　桜と申します、皆さん妹と仲良くしていただいて本当にありがとうございますね」
結局寮で話すことになりました・・・
「歌織お姉さまってこんなに綺麗なお姉さまがいらしたんですね！」
「お姉さまのお姉さま・・・」
「歌織に似てる・・・」
上から真名ちゃん、美海、優雨ちゃんの順番ね
「あ・・・ありがとうございます・・・」

正直似てるとか似てない以前に男としてもプライドがズタズタ・・・
「そうそう、今日は歌織に届け物があって来たの」
届け物？
「忘れ物はしれないと思うのですけれど・・・」
一応全部持ってきたからなぁ
「はい、これ」
渡されたのは一眼レフカメラの交換用レンズだった
「Ｆマウントの　ＡＦレンズだしＶＲだから手ブレは少ないはずだよ」
※Ｆマウントはニコンの一番レフカメラが採用するニコンＦマウントのこと、ＡＦはオートフォーカスの略、ＶＲ（Ｖｉｂｒａｔｉｏｎ　Ｒｅｄｕｃｔｉｏｎの略）は手ブレ補正機能のこと。
「これ・・・ニッコールだから最大４００ミリだと万の桁で３桁目まで行くよね？」

このレンズは新品なら相当高いと思う
「え？たぶんそのくらいはするかな？でも歌織のお誕生日に何も贈ってないからその代わり」
その代わりって・・・
「もう何も言いません、私の負けです・・・」
もうこのときの姉に何を言っても無駄だし
「じゃあ、プレゼントも渡したし、帰るね」
そう言って姉さんは帰っていった・・・相変わらずの人だ・・・

「何というか、強烈なお姉さまだったね・・・」
陽向さんが姉さんを見送ったあと僕に言った
「何というか、溺愛と言って良いのでしょうか、姉は半分狂気の沙汰で私を見ています・・・」
一種の心の病気だろうとは思っているけど
「なんか私、歌織ちゃんが寮に入った理由が分かった気がします」

姉の騒動でもう一つの問題を忘れていた事は言い訳にしたくない・・・

・

第7話へ続く

第６話「休日綺想曲」（前編）（後書き）

香織理「はーい、第６話「休日綺想曲」（前編）でした」
歌織「お姉さま！私の仕事を撮らないでくださいよ」
作者「今回のゲストは香織理さんです・・・」
香織理「いいじゃない、あなたはいつもできるのだから少しぐらい私にやらせても」

作者「さて今回の反省点、※印が多かった」
歌織「一応検索すれば出てくるような物なんですけどね」
作者「いや、そのまんま商品名でも出そうかなと思ったんだけどその方が面倒だった」
香織理「そうね、交換レンズ？の話では私には何が何だか分からなかったわ」
歌織「その前に姉さんのバイクで商品名出てますけど」
作者「だってさ、あんなにでかいデュアルパーパス（舗装路でも未舗装路でも快適に走れるバイク）をどうひょうげんすりゃ良いんだよ！」
歌織「それを考えるのがあんたの仕事だよ・・・」
香織理「でも、家族内なら普通じゃないかしら、だってずっと家にあったのでしょう？」
歌織「まあ、そうですね」

作者「さて次回は合宿が始まりますよ！」
香織理「そこで明かされる歌織とある人物との意外な接点！」
歌織「次回乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第７話「休日綺想曲」（中編）」

香織理「あなたは一歩を踏み出す勇気がありますか？」

第7話「休日綺想曲」（中編）（前書き）

作者「実は・・・」
陽向「実は？」
作者「前編・中編・後編だと足りませんｗｗ」
陽向「マジ！？」
作者「仕方ない、こうなれば伸びた分は大幅カットで・・・」
陽向「と言うわけで、ちょっと作者さんが考え込んでいるのでとりあえず本編をどうぞ！」

第7話「休日綺想曲」（中編）

もう一つの問題・・・
夏の聖應ＯＧ合宿＋の部屋割りである
「基本的には使っている人＋ゲストにするしかないわね・・・」
半分徹夜になりながら部屋割り決定・・・
部屋割り
（1階）
優雨の部屋［柏木　優雨／皆瀬　初音／ケイリ・グランセリウス］
燐の部屋［佐々木　燐／冷泉　淡雪］
空き部屋Ａ［小鳥　遊圭／高根　美智子］
（2階）
空き部屋Ｂ［宮小路　瑞穂／厳島　貴子］
空き部屋Ｃ［妃宮　千早／神近　香織理］
史の部屋［度會　史／御門　まりや］
歌織の部屋［鷺宮　歌織／昕　雅楽乃／上岡　由佳里］
陽向の部屋［宮藤　陽向／周防院　奏／七々原　薫子］
真名の部屋［天城　真名／藤本　椿］
美海の部屋［雨宮　美海／十条　紫苑］

皆さんの希望を最大限に反映したつもりだけど、就寝だけだから問題はないか？
一番心配なのは真名ちゃんと椿さん・・・面識無いからなぁ

「結果的にこういう感じに部屋割りしましたけど、どうでしょうか？紫苑お姉さま」
［良いのではないかしら］
「確かに身も蓋も無い言い方になってしまいますが寝るだけの部屋

ですからそれでも良いとは思えますが・・・」
［あぁ、そう言う意味で言ったのではないのよ］
「そうなのですか？」
［だって私、美海ちゃんとの相部屋はとても楽しみですからね］
「そうですか・・・」
翌日紫苑お姉さまに連絡を取った。その答えがさっきの会話だ。
あ、説明を忘れていたけれど貴子お姉さまと紫苑お姉さまには転入前に瑞穂さんと同じくお世話になりました。
女性としての身のこなしとか・・・そう言うのを・・・ある意味、僕の黒歴史だな。

「こういう感じにしてみました」
部屋割りをその日の夕食で発表すると思ったよりは好印象だった
「いいですね！」
へー良いんだ。僕的には由佳里お姉さまから僕の部屋に泊まりたいという希望が以外中の意外だったけど。
「どうしたの？歌織」
考え込んでいたら優雨さんが不思議そうに聞いてきた
「ちょっと、想定外のことが」
「どんな想定外ですか？」
会話に入ってきたのは優雨さんに紅茶を入れている燐ちゃんだった。
「そうね、想定外だったわ。まるで何一つ証拠品のない事件にみたいに」
でも証拠品の無い事件は無いけれどねといいつつ僕は廊下に出て掲示板に部屋割りを貼った

次の連休（の前日）
放課後、僕は寮の前でＯＧのお姉さまが来るのを待っていた。
それにしても、暑い・・・気がつくと携帯の温度計は３５度を指し

ていた。

皆さん４時頃には到着の予定だったからそろそろ・・・。

＃1紫苑の場合

「お久しぶりですね、歌織ちゃん」

声の主は、紫苑お姉さまだった。

「はい、お久しぶりです。紫苑お姉さま」

「あらあら、とってもうれしいお出迎えね」

そういってお姉さまは僕を抱きしめた。

「・・・苦しいです」

このまま続けば確実に圧迫死する・・・

「ごめんなさいね、つい・・・」

もう一歩で死ぬところだった・・・

＃2瑞穂・貴子の場合

歌織ちゃんが紫苑お姉さまの案内をしている間は私、陽向がお出迎えします。

「それにしても・・・暑いです」

もう汗ダラダラですよ・・・

「あなた、大丈夫？」

ちょっと、気分が悪くて下を向いていたら話しかけられてしま・・・

「瑞穂お姉さま？」

歌織ちゃんが見せてくれた写真の人だった。

「あなたは、陽向さんね？」

もう一人、この方が貴子お姉さまなんだ

「お二人ともお早いご到着ですね」

目安としては１７時前後ということだったけれど

※現在時刻は１６時１０分

「ええ、少し早いほうがいいと思って」

歌織ちゃんのお話だともうお二人とも大学を卒業されたとか。

ところで、歌織ちゃんと瑞穂お姉さまはどういう関係なんだろう？

＃3まりやの場合
※瑞穂・貴子・紫苑を出迎え担当の二人が案内していたために誰もいませんでした。
なので省略。

歌織ｓｉｄｅ
まりやお姉さまの到着を機に続々とお姉さま方が集まってきた。
「本当は茉清さんたちも来られれば良かったんだけどね」
お茶を飲みながらこの話題を振ったのは薫子お姉さま。
「お二人とも忙しいと言うお話を伺っていましたしね」
と千早お姉さまが
陽向さん曰く、去年の光景がよみがえった！そうです。

いつもは6人しかいない寮が大勢になってしまったので料理は自分たちで作ることになっている。
厨房に立つのは
僕（歌織）
由佳里お姉さま
千早お姉さま
史お姉さま
瑞穂お姉さま
監督として最年長者の椿お姉さま
の6人だ

キッチンは決して広くはないので分担して進めていく
由佳里お姉さまと僕でスープを任されたんだけど
「どうしましょうか・・・」（歌織）

「そうね・・・」（由佳里）
何を作るかなんて決めてなかったんです
「凝った物を作る時間はありませんし、シンプルに行きませんか？」
（歌織）
「アサリがあるから、白菜と煮込んでみようか」（由佳里）
と言うことでスープはアサリと白菜のスープとなりました。

由佳里お姉さまの手際は凄く良かった。
アサリは砂出しに3時間をかけてしまい夕食にはギリギリの時間になってしまった。
でも
「おいしい～」
と皆さんには好評です
「何というか、次の料理を食べたくなるような味ね」
スープを飲んだ香織理お姉さまの感想だ。
「お褒めいただいても何もでませんよ、香織理お姉さま♪」
「歌織、ご機嫌」
優雨ちゃんに言われて初めて気がついたけど確かに上機嫌だった。

食後の雑談にて
「お姉さまは瑞穂お姉さまのお姉さまと言うことですよね？」
椿お姉さま、瑞穂お姉さまのお姉さまで著名な料理研究家だそうです。
ちなみに自称魔法使い・・・って、中二病にに見える。
※アニメ版ドラマＣＤシーズン０２に登場します。瑞穂との関係について詳しくはアニメ版ドラマＣＤを聞いてください。

「そうよ、私は一発であの子が聖應の生徒だって分かったわ」
すごく自信満々でした。
「本当ですか！？」

それは驚きだったよ
「ええ、だって私は魔法使いだから」
そーですね・・・

そして夜が更けていき
「それじゃあ、皆さん寝ましょうか」
瑞穂さんのお開き宣言で各自の部屋に行く。

そして、僕の忘れられない夜が始まってしまった。
第８話へ続く

第7話「休日綺想曲」（中編）（後書き）

作者「第7話「休日綺想曲」（中編）でした」
歌織「そう言えば小説を始めてから何通かご感想が来ていますけど、返信はなされないんですか？」
作者「返信できないのは皆さんのツッコミが鋭すぎて何を書いてもネタバレになってしまう事が原因で・・・」
歌織「返信できないと」
作者「読んで作品を作る上で参考にはしているんですけど・・・」
歌織「なるほど」

歌織「もう一つ私としては疑問なんですけど、何で史さんの出番が大幅カットされてるんですか？」
作者「だって歌織は何でも一人でやっちゃうし、学年も違うし、その上に妹持ちだからな・・・」
歌織「そう言えば史さんの妹って・・・」
作者「君だ」
歌織「マジですか！？」
作者「マジ」

歌織「さて、ここで私のボツになった設定と公開していなかった設定を紹介します」
ボツ設定
・歌織の右目は義眼
作者「コレはじゃあどうやってバイクの免許を取る？という事で却下されました」
・歌織は1年留年している
作者「留年した理由を考えるのが面倒だったので却下されました」

未公開だった設定
・歌織は双子の兄である
歌織「やっと妹が出てくるのか」
・美澄家の実家は伊豆半島（最寄り駅は伊豆急下田）にある
歌織「あそこには大婆様いるから行きたくないな・・・」
作者「こんな感じかな」
歌織「あとで公式プロフィールに追加してくださいね」
作者「はいはい」

作者「さて次回は第８話「休日綺想曲」（後編）」
歌織「それは夢の中に出てくるＦａｔｅｆｕｌなお話」

セーブしますか？

ＹＥＳ

セーブしました

第８話「休日綺想曲」（後編）（前書き）

美海「作者さんが体調不良のためＭＣ交代してきました・・・」
陽向「いや、絶対逃げだでしょ」
美海「逃げちゃったんですか？」
陽向「だってさ、収録に来ない原作者って・・・」
美海「それは言わない約束」
陽向「だってぇ！」

美海「とりあえず、第８話「休日綺想曲」（後編）ご覧ください」

第8話「休日綺想曲」（後編）

僕のベッドはサイズがダブルなので一応二人は寝られるけど、僕は簡易ベッドで寝るかな。
「何を言っているのですか！歌織、貴方はちゃんと自分のベッドで寝てください」
「お・・・お姉さま？」
何故かお姉さまに押し切られて僕はベッドで寝ることになったけど、何故由佳里お姉さまと雅楽乃お姉さまがじゃんけんで簡易ベッドか僕と一緒か争っていって居るの？
そして結論として
「３人で一緒に寝ましょう」
と雅楽乃お姉さま・・・マジですか？狭いと思いますよ？
「それが良いようね」
由佳里お姉さま！？貴方もですか！？何があったの？いったい何が・・・。
実際どうだったかって？ええ、一緒に寝ましたよ３人で。
僕が真ん中、右に雅楽乃お姉さま、左に由佳里お姉さま。
僕は眠りにつくまでガチガチだった。

気がつくと僕は道に立っていた。
たぶん場所は学院だろう・・・でもプールが屋外プールだった。
僕の記憶だと千早さんが聖應に来る１年前２００７年（正確には２００６年～２００７年）に改修工事があったらしいけど、じゃあここは２００６年以前の聖應？
※時間軸は公式サイトの年表を参考にしました。プール工事に関しては乙女はお姉さまに恋してる　櫻の園のエトワール（小説・ドラマＣＤ　等）をご覧ください。
何言ってるんだこの注釈は・・・

※初めてコレが注釈であると指摘しましたね♪
まあいいや

これが夢であるという実感はなかった。むしろ自分自身の記憶を回想しているような気分だ。
でも動きは僕の自由になる。
何だろう1人称視点で思い出の中を歩き回っているような・・・。
でも不思議と行くべき所は分かっている気がする。

陸上部部室
・・・僕はそれが普通のように練習を始めていた。
僕が得意なのはどちらかというと瞬発力を使用する短距離だったんだけど。
普通に長距離の練習だね。いつも見る陸上部の長距離練習と一緒だから。

そして視界が暗転して、白い天井。
微かなアルコールのにおい。
ここは病院の病室？
においまで分かる！？本当に夢なのか？
僕の手を握っている人がいた。
その子はどこで見たような女の子だった・・・まさか
僕はその子に微笑んだ。いや僕じゃないかもしれない。誰かの記憶に僕自身がシンクロして自分のことのように感じているのかもしれない。

そうして考えているうちにまた視界が暗転、そして僕は深い潜水から戻って来たように荒い息をしながら目を覚ました。
「はあ・・・はあ・・・夢？」
夢なのか？

僕の体は汗でベタベタだった。
セントラルヒーティングが壊れたのかな？
そう思って体を起こすと
「歌織ちゃん？大丈夫？」
由佳里お姉さまだった。
「由佳里お姉さま・・・大丈夫でです」
そう言うとお姉さまは安心したようでまた目をつぶった。
時刻は午前５時過ぎ、仕方ない起きよう。
僕はお姉さまを起こさないように起きた。

今日はＯＧのお姉さまたちが担当する企画で僕は記録係を担当する。
と言っても写真だけだけどね。

重いけどデジタル一眼レフを持ってくしかないかな。
のＣＦ（コンパクトフラッシュ）カードと同じ容量のＳＤＨＣカードをカメラに入れた
※歌織のＤ３００ｓはどちらのカードも対応したダブルスロットが着いています。
あとはもう一台の予備の一眼レフカメラに１６ＧＢのＳＤＨＣを入れればいいか。
今日のバッグは小さい方で良いか、どうせ予備のレンズは２本しか持って行かないし。
※歌織の撮影時の最大装備は１眼レフカメラのボディ２台・交換レンズ５本・３脚・１脚を装備するようです。
３脚や交換レンズをテキパキとバッグに入れていると
「カメラってさ、面白い？」
ハッとなって振り向くと由佳里お姉さまだった。
「面白いですよ、自分が残したい物を残せますから。もっとも残せない物の方が多いですけどね。ところでお姉さまはもう起きてしまわれるのですか？もう少し時間がありますけど」
まあ寝てない僕が言うのも何だけど

「うん、なんか目がさえちゃったみたいでね」
残せる物はできるだけ残したい、たとえそれが・・・。
「時々ありますよね、そう言う時って」
カメラ自体の荷造りは終わっていたのであとはバッテリーだけ。
机の上に置いてある3つの充電器のうち2つは同じもので予備機のバッテリーグリップに、最後の一つだけは上位機種に使用されているバッテリーをバッテリーグリップに入れて使用する予定。

「お二人とも早起きなんですね」
その後由佳里お姉さまと談笑していると6時を過ぎたころだったろうか雅楽乃お姉さまが起きてきた。
「おはようございます、雅楽乃お姉さま、ちょうど紅茶でも入れようと思っていたのですがお姉さまはいかがですか？」
僕はお姉さまにポットを見せる
「そうですね、いただきましょうか」
そのとき
―コンコン
「歌織お姉さま？いらっしゃいますか？」
美海だった
―ガチャ
「そろそろ時間になってしまう？」
集合は7時だったけど。
「いえ、お茶をと思いまして・・・」
あ、ごめん・・・入れてる
「美海も飲む？」
こう言うしかないな
「あらあら、では私もご一緒してもよろしいですか？」
そう言って美海のあとから入ってきたのは紫苑お姉さまだった。
「はい、ではカップを取ってこなければいけませんね、では美海一緒に行きましょうか」

僕は取り合えずカップを取りに行く。
その後、時間までお姉さま方のお茶のお世話をしていたのは言うまでもない。

そう言えば今まで忘れていたけど僕たち学生はお姉さま達が考えている行き先を知らない。どこに行くんだろう。
水着が要ると言うから外房（千葉）にでも行くのかな？

そして忘れていることがもう一つ。
第5話の会話を思い出してほしい
「毎年7月のあたまになると祖父の家に泊まりに行くんだけど、今年は寮生活だし行かないと決めていたのですが、お爺様に「3連休もあるし寮生の方が来ても問題はないから7月には帰ってきなさいと」言われてしまいました」

こういう会話が僕と陽向ちゃんの会話があったはず。
そしてまだこのときはその会話を忘れていた・・・。
第9話へ続く

第8話「休日綺想曲」（後編）（後書き）

歌織「作者さーん！どこ行ったんですか？」
紫苑「作者さんからお手紙を預かってますよ」

歌織「紫苑お姉さま！？」
紫苑「このお手紙によると「風邪引きましたｏｒｚ」と言うことらしいですよ」
歌織「タイトルが行き詰まって夜更かししすぎたんでしょ」
紫苑「コレは小説の執筆に影響するのかしら？」
歌織「いや、書かせますよ」
紫苑「作者さんもお気の毒に」

歌織「作者さんから預かっているメモによるとですね、紫苑お姉さまお願いします」
紫苑「はい」

歌織「幼少期の記憶はおぼろげな物」
紫苑「海に向かう歌織ちゃんに忍び寄る罠」
歌織「そしてタイトルに悩む作者ぁ！？」
→台本を読んでいます
紫苑「一切遊ぼうとしない歌織ちゃんのためにお姉さまたちが考えた方法とは？」
歌織「別に私は記録係に徹してますから・・・」
紫苑「ダメよ、読者さんたちのためのサービスカットも必要よ」
歌織「何ですかそれー！」

歌織「次回乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第９話「小さな姫と大きな家」（前編）」

紫苑「秘密だらけの貴方が知りたい・・・」

第9話「小さな姫と大きな家」（前編）（前書き）

陽向「今回の前半は作者さん多忙のため作者さんからのメッセージのみとさせていただきます」

歌織「では読み上げますね「今回は前回の続きですぶっちゃけ今回も前編・中編・後編の3段構成とさせていただきます」だそうです」

陽向「今回は手抜き？」

歌織「そんな事言っちゃダメ！」

第9話「小さな姫と大きな家」（前編）

構内アナウンスが電車の到着を告げていた。
［まもなく1番線にホリデー快速２１５号、新宿行きが参ります。危ないですから黄色い線の内側でお待ちください。この電車は２つドア２階建て１５両です。グリーン車は足下の数字８番から１１番でお待ちください］
朝の駅、それは土日ダイヤで運行される電車。
ホームはラッシュ直前の静けさがある。
※ホリデー快速２１５号はこの作品オリジナルの快速電車です。時刻表で探しても出てきません。
渡されたのはブラックのカードだった
「瑞穂お姉さま。コレって、見たこと無いんですけどＩＣカード乗車券ですか？」
「そうよ。コレはちょっと特別・・・なのだけどね」
そう言うと瑞穂さんは僕に微笑んだ。
たぶんこのカードは・・・。

この手のＩＣカード乗車券はいっぱい持ってるけどいつもは日本で使用するスマホのモバイルＦｅｌｉＣａ機能で済んじゃうからなあ。
※ＦｅｌｉＣａとはソニーが開発した非接触型ＩＣカードの技術方式である。英語で「至福」を意味する”Ｆｅｌｉｃｉｔｙ”と”Ｃａｒｄ”（カード）を組み合わせてつくられた名称で、ソニーの登録商標である。ちなみにＳｕｉｃａ・ＰＡＳＭＯ・Ｋｉｔａｃａ・ＴＯＩＣＡ・ＩＣＯＣＡ・ＳＵＧＯＣＡなどがＦｅｌｉＣａを使用したＩＣカード乗車券である。

～車内編～
電車内だと僕は紫苑お姉さまが隣、向かいの座席には美海と由佳里お姉さま。
僕は窓側の席で・・・
「歌織ちゃんは甘い物だとどんな物が好きなの？」
質問攻めに買っている最中です
「甘い物ですか・・・作るのは得意ですけど、自分で食べるのはあまり・・・そうですねスッキリとした甘さの物なら好きですね」
女の子は甘い物が好きと聞くが僕はちょっと・・・ね
「そう、ではそれを考えて選ばないとね」
お姉さまは微笑みながら言った

「お姉さま？いったい何を選ぶのですか？」
僕は紫苑お姉さまに質問した
「うふふ、秘密♪」
ああ、あの人の後ろから面白いことを思いついたオーラが・・・。
そのとき携帯のバイブレーターの音が鳴った
僕の携帯だった。
ディスプレイには［Ｒｅｃｅｉｖｅｄ　ａｎ　ｅｍａｉｌ！］（メールが届きました）と言う表示が
誰からだ？
「霧島って事は匠（しょう）から？」
［歌織、久しぶり。榊原君って覚えてるかな？その子が転校したからその報告にメールしました。暑い日が続いてるけど大丈夫？じゃあまたメールします］
そっか、あいつ転校するんだ。
最後にあったのって１年近く前だけど・・・
※榊原君が苦労するのはまた別のお話です

さて、特にトラブルもなく新宿に着いた
次に乗るのは
［まもなく１番線に湘南新宿ライナー　伊豆急下田行きが参ります、危ないですから黄色い線の内側でお待ちください。この電車は２つドア１０両です。グリーン車は足下の数字８番から１１番でお待ちください］
※現在、湘南新宿ライナーは運行していません。また伊豆急下田行きもありません。

伊豆急下田！？
「そう言うことですか、瑞穂お姉さま・・・」
「ごめんなさいね、貴方のお爺さまからお願いされいたことで・・・」
歌織ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

瑞穂ｓｉｄｅ　ｉｎ
まあ鉄道好きの歌織ちゃんだし、いつ気づいてもおかしくはなかった
「帰っても良いですか？」
俯いてボソッと歌織ちゃんが言った
「えっと・・・寮に？」
「四谷の家にです」
コレは・・・・かなり来てる！？
「ちょっ！？ちょっと歌織ちゃん？」
歌織ちゃんの顔はみるみる真っ青になっていく
「いえ、祖父が苦手と言うことではないのですが、何というかあの家には思い出が多すぎて・・・自律神経失調症というかうつ病になりそうです」
いったいあの家でこの子はどんな苦労をしたんだろう
「ちょっと、事情がありそうだね」

「まあ、お爺さまのことだから、黒服が私服で何人か来てると思いますよ。たとえば、向こうの自動販売機の裏に居るサラリーマン風の男、売店で雑誌を読んでいるホスト風の男とか・・・」
確かにちらちらとこっちを見ているけど
「でもよく分かるよね？」
「そりゃあ、家で見たことあるから・・・」

それ以降、歌織ちゃんはあからさまに口数が少なくなった。
そんなに実家に行くのがいやなのだろうか、いやむしろ僕らが計画したことで傷つけてしまったかもしれない。

「じゃあ・・・適当に写真でも撮ってますね」
車内でもしゃべることなく一歩引いたところから写真を撮っていた
「瑞穂さん、歌織ちゃんはいったい何があったのですか？」
貴子さんに聞かれた。
「ちょっと、開けてはいけない箱を開けてしまったみたいです」
一応笑顔ではあるけど、どこか無理している感じがする。
どうこうしているうちに目的の駅までついてしまった。
瑞穂ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第１０話に続く

第9話「小さな姫と大きな家」（前編）（後書き）

作者「さて時間が無いです」
歌織「またゲッソリしてますね」
作者「ちょっと多忙でＰＣの前に座れなくて・・・」
歌織「そのために更新遅れたわけ？」
作者「遅れてはいないけど、正直ね・・・」

作者「とりあえずあと2本書けば次の章に入れるから」
歌織「一波乱ですか？」
作者「これ以上おまえに重圧をかけたらおまえキャラとしてつぶれるぜ」
歌織「それは困る・・・」
作者「だから、ちょっと欝気味まで落としてからｒｙ」
歌織「オイ」

作者「結局は書いてる作品が増えたことが原因だけどね」
歌織「待たそうやってあっちこっち出すから手が回らなくなるんだ・・・」
作者「今回は3作品までが限界だね」
歌織「更新速度は落とさないでよ？」

作者「と言うことで次回乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第１０話「小さな姫と大きな家」（中編）」
歌織「私としては、もうみんなに隠しごとはできない・・・」

ご意見・ご感想をお待ちしています。

第１０話「小さな姫と大きな家」（中編）（前書き）

作者「今回はちょっと書き方が変わりました」
陽向「文と文の間が開いただけじゃないですか」

作者「そう言えばこの話ってもう中編だったんだと今更ながらに気がつき・・・」
陽向「ページ足りる？」
作者「玉なら次回が尋常じゃなく長くなるだけだから」
陽向「マジで・・・」

作者「とりあえず本編の方どうぞ」

第１０話「小さな姫と大きな家」（中編）

「毎度ご乗車ありがとうございました。次は終点、伊豆急下田、伊豆急下田です。お忘れ物のございませんようお気を付けください。なお本日は傘のお忘れ物が大変多くなっおりますお気を付けください。次は終点、伊豆急下田です」

着いた・・・僕の実家のある街・・・もうここは腹括るしかないでしょ。

「あのね歌織ちゃん・・・」

「何ですか？瑞穂お姉さま」

「無理しなくても良いからね、いやなことははっきり言ってくれればよいからね」

じゃあと言いたいけど、ここまで来てそれはないよ瑞穂さん

「気にしなくても結構ですよ、覚悟はしましたから」

リムジンの迎えが改札の向こうに見えた時点で僕は家に帰ることを知っているから。

クルマだと5分とかからないからな

「お帰りなさいませ、歌織お嬢様」

出迎えてくれたのは桜乃さんだった。

家に着くと僕はまず皆さんを応接室に通しお爺さまに会いに行った
※ここからは英語での会話を翻訳しています
「おお、歌織。帰ったか」
いつも通りのお爺さまだった
「どうしても僕をここに呼びたかったようですね、お爺さま」
「お前が帰りたくないというのも分かるが、儂もここを離れられないのは知っておろう」
確かにお爺さまは仕事の関係上ここを離れることはできないけど
「柚木の具合は？」
美澄　柚木、僕の妹だ。
「だいぶ良くなったぞ、先月退院したと携帯に電話した」
「それは見たけど、食事中に携帯にかけられるのは迷惑だ」
先日の食事の後から、僕はそれが原因で食事中は携帯の電源を切っていた。
「柚木に会ってくれぬか？」
「それは良いけど、お客様を待たせて？」
僕は早々に話を切り上げたかった
「それは儂が対応しよう」
この人は言い出したら聞かないからな

「分かったよ」

―コンコン―

「鍵なら開いてる」

中からはぶっきらぼうな声、ああ柚木だ

「入るぞ」

「兄さま!?いつお帰りになって・・・・あれ?」

そう言えば柚木には話してないんだった・・・電話だけだったし

「お姉さま（桜姉さんの事ね）？じゃない・・・・」

何というか柚木の目が点だ

「諸事情でこんなカッコしてるけど僕は僕だよ?」

そのときの僕の格好?聖應の制服（夏服でスカート丈はショート）だけど

※制服の選択は御門まりやがしたようである。もちろん本人の意志は絶賛スルー☆

スルーされてたのか・・・・まりやさんからは間に合う在庫はこれしかないって言う説明を・・・

※今更気がついたの?聖應行ってから半年たってるんだよ?と言うか嘘に決まってるよねそれ

「兄さま？どうしたの？」

「いやちょっと現実につかれたというか・・・」

「そんなところで項垂れてたら」

項垂れてたら？

「パンツ見えるよ？」

はい？

「女の子ならもっとスカートの防衛に気を遣うべき・・・お兄さまは白と・・・」

スイマセン・・・・って

「柚木！？何でメモ取ってるんだ！」

「気にしないで単なる趣味」

「オイ」

とりあえず事情を話し終わると

「でも・・・兄さま、体に変なところはない？」

この子は何というか勘が鋭いと言った方が良いかな？

「特にはないけど・・・何で？」

「何でもない、ちょっと気になっただけ」

「さて、お爺さまだけだと間が持たない気がするからそろそろみんなの所に行こうかな」

キョトンとする柚木、お爺さま・・・どんだけこいつに情報入れてないんだよ

「お客さま？」

「うん、僕の聖應のクラスメイトと妹とお姉さま」

一応聖應と言えば分かると言うくらい聖應は有名なのか柚木は納得という顔なんだけど

「と言うことは兄さまは女の子に囲まれて・・・・」

なんか怖いよ？柚木サン？

「僕も今は女の子だけどね・・・・」

―応接室―

「初めまして姉がお世話になってます、妹の鷺宮　柚木です、仲良くしてくださいね」

要するにお爺さまのワガママなんだね・・・

第１１話に続く

第１０話「小さな姫と大きな家」（中編）（後書き）

作者「と言うことで第１１話でした」
歌織「柚木が出てきたと言うことは大変なことに・・・」

作者「まあぶっちゃけ歌織さんが苦労するフラグが立っただけです☆」
歌織「ちょっと用事を思い出すことにして四谷の家に・・・・」
作者「何処に行くんですか？カオリサン☆」
歌織「僕は逃げないぞ・・・逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ」

作者「ちょっと歌織さんが戻ってくるまでゲストと雑談でもしておきます」
柚木「まあ兄さまとしては頑張っている方でしてよ」
作者「いきなりの登場ですね柚木さん」
柚木「まあ作者さん、貴方・・・・」
作者「何？」
柚木「貴方の後ろに・・・・」
作者「何それ怖い」
柚木「若い女性が立ってますわよ」
作者「はい？ちょっと見てみよう・・・」チラ
歌織「僕は逃げなくても良いんだ！」
作者「怖いわ！って歌織じゃん」
柚木「テヘ☆」
作者「もーグダグダやん」
歌織「仕方ないけどね」
作者「ところでさっきから雷ごろごろ言ってて怖いんだけど・・・」

柚木「歌織が女になったからその反動で世界が・・・」
作者・歌織「「それはない！」」

歌織「さてと次回は？」
柚木「次回乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第１１話「小さな姫と大きな家」（後編）歌織が開かす笑劇・・・じゃなかった衝撃の事実とは」
歌織「真実を話すときが来たようですね・・・」
作者「実は歌織はホントに元から女だった！？」
柚木・歌織「「それはない！！」」

ご意見・ご感想をお待ちしています。

第１１話「小さな姫と大きな家」（後編）（前書き）

作者「投稿日間違えた！」
陽向「本来なら昨日のはずですが？」

作者「機能は小説書いて普通に寝てたｗｗｗｗ」
陽向「休みで曜日感覚が欠如したんですね、分かります」
作者「とりあえず第１１話です。どうぞ」

第１１話「小さな姫と大きな家」（後編）

―応接室―

「初めまして姉がお世話になってます、妹の鷺宮　柚木です、仲良くしてくださいね」

僕と妹の相違点

・髪の色（僕：銀、妹：金）

・瞳の色（僕：群青、妹：サファイアブルー）

・髪型（僕：ショート、妹：セミロング）

「お顔はそっくりなのにずいぶんと雰囲気が違うのですね」

「びっくりです！」

上が紫苑お姉さま、下が燐ちゃん

「一応これでも一卵性双生児なんですよ」

そう、僕と柚木は異性一卵性双生児だった。

それでも細かいところが異なっている特異ケースだったらしい。

「へーだから似てるんだ」

「ところでお爺さま、自己紹介はなされたのですか？」

お爺さまは基本自己紹介という概念がないから・・・

「おお、忘れていたよ。ご挨拶が遅れて申し訳ない、歌織の祖父でフレデリック・Ａ・鷺宮じゃ。フレディーでかまわんぞ」

「はいはい、お爺さま。フレディーなんて愛称を使えるほどお若くはないので自重してください」

とバッサリ切る我が妹・・・

「かおりぃ！孫がいじめる～！」

僕に泣きつくな・・・

「私も孫ですが・・・・」

お爺さま・・・僕は疲れました、貴方の愚行を見て・・・・。

「楽しいお爺さまなのですね。歌織ちゃん」

奏お姉さま！？それは違います・・・

その夜

食事の前にテラスに出ていると柚木が来た。

「ねえ兄さま、学校は面白い？」

ふと思ったように柚木が言った

僕は困ったように

「転校する前？それとも後？」

と聞いてみた

「どっちも」

そうだよな。体の弱い柚木にとって学校は未知の場所なんだな

「そうだね。面白い場所ではあるね」

僕は苦笑していたのか分からないくらいの表情だった。

「私も行きたいな。学校」

そう言って柚木は戻っていった

食堂にて

食事も適当に進んだところで

「今日の料理は半分歌織お嬢様が作られましたので」

という桜乃さん・・・黙っててほしかったな

「どれですか？」

目を輝かせるのは陽向ちゃん・・・・

「夏なのでスープはガスパチョにしてみました」

※ガスパチョとはスペイン料理とポルトガル料理の冷製スープであり、スペインのスープでは極めて有名なもののひとつである。

「後はデザートにスフレを作ってみたのですが・・・これが難しいのでシェフに見ていてくださいとお願いをしています」

※スフレはメレンゲに様々な材料を混ぜオーブンで焼いて作る、軽くふわふわとした料理。　主菜またはデザートとされる。

「では用意があるのでちょっと行ってきますね」

そう、スフレは基本的にメレンゲを使用する料理なのでオーブンから出したばかりでだとスフレは容器から高くはみ出してふくらんで

いる。しかし２０分から３０分程度でしぼんでしまうため僕は途中で退席して持ってこなければいけなかった。

「私も行きます」
そう言って立ったのは美海だった

「美海・・・そうね、この人数分だとちょっと一人では大変だからお願いするわ」

「じゃあ姉さま、私も行くよ」

柚木！？

「姉さまと美海ちゃんだけでも大変でしょ？」

何か悪巧みでも考えてないと良いけど・・・

「分かったわ、お願いね・・・・でもその前に口の周りに付いたベシャメルソースとチーズを拭きなさい・・・」

※ベシャメルソース（仏：ｓａｕｃｅ　ｂ？ｃｈａｍｅｌ）：牛乳で作った白いソースである。英語ではホワイトソース（英：ｗｈｉｔｅ　ｓａｕｃｅ）と呼ぶ。

おおかたラザニアでも頬張ってたんでしょう・・・

あんたって子は昔から変わってない

後で雅楽乃お姉さまから聞いた話だが僕たちがスフレを取りに行っ

ている間に
雅楽乃：「私の前ではあんなに甘えてくれる歌織も家ではしっかり者の姉なのですね」
千早：「家でしっかりしている分、雅楽乃に思う存分甘えられるのではないかしら？」
瑞穂：「そうね、次女とはいえお姉さまがあれだけ離れていると必然的にそうなってしまうのかしら」
薫子：「しっかりと芯のある性格だとは思っていたけど」
由佳里：「それだけ苦労も多いって事ですよね・・・」
こんな会話があったという

僕たちがスフレを持って戻ってくると
「つらいことがあったらいつでも相談してね」

由佳里お姉さま・・・その悩みを言ったら僕は・・・

「はい、そのときは頼りにさせていただきますね」
と微笑んでおいた。

味？味はチョコだよ？ちょっと苦めに作ったけど苦いのが苦手な人には比較的甘い仕様も用意したし
「右がビターチョコも入れて作った物で、左は入れてない物です。さあ、皆さん。スフレが冷めてしぼんでしまう前に、食べてくださいね」

味？悪くはなかったけどビターは苦かった・・・

―深夜―
「まさか・・・連れてこられるとは思わなかったな・・・」
僕は風に当たりにバルコニーに来ていた
「姉さま？」
柚木？
「柚木、どうしたの？眠れないのかい？」
確かに大人数で柚木に会いに行ったのは初めてだからな・・・
柚木は生まれてからずっと家庭教師に教わっている。
それは彼女の体が弱かったから。生まれつき虚弱体質だった彼女はずっとこの屋敷と病院を行ったり来たり。
「ちょっと・・・目がさえちゃって」
あー・・・そう言えば柚木は苦い方のスフレを食べてたからもしかしたら
「ホットミルクくらいならお作りしますよ・・・姫様？」
そうだな・・・僕には両親に意見できるくらいの発言力も無いわけだけど、彼女を学校に行かせてあげたいから動きたかった
「ねえ・・・兄さま。私と兄さまは表と裏ね決して交わらないのに似たもの同士」

「そして何故か交わる・・・不思議な関係だね。柚木・・・でもね柚木、お客様をお連れしていたの？」

ちょっとカーテンが動いただけだったけど月が雲から顔を出して影ができたことでそこに誰か居ると分かった

「え？」

柚木も気がついて無かったのか・・・

「そこにいらっしゃいますよね？ケイリお姉さま？」

そう、そこにいたのはケイリお姉さまだった

「気がついていたんだね歌織。でも君は・・・」

寝間着姿のケイリお姉さまがカーテンの裏から出てきた

「まあ、ケイリさんにはばれても仕方ないと思ったけど」

「普段でもそんな声なんだね、歌織は」

はじめから気がついてなったと言えば嘘になる

「一応体は女の子ですからね」

僕は心のどこかでこの生活を終わらせたかった？

「性同一性障害なのかい？」

「そうだとどんなに救われるんでしょうね、でもね少なくとも1年前の僕は男でしたよ？」

いやもう終わったからどうでも良いか

「へー、面白いね歌織は。心配しなくてもこのことは言わないよ、面白そうなことは大歓迎だから」

ケイリさん？
「良いんですか？学院に不審者をはびこらせて」
「去年も似たような状況だったけど？」
ケイリさんは分かって居るのか、千早さんのこと。

翌日
「では、お世話になりました」
瑞穂さんが代表で挨拶をして僕たちは家を後にした

［まもなく平塚、平塚です。平塚では後から参ります東海道スターライナーの待ち合わせのため5分ほど停車いたします。お出口は左側です］

「ここで5分停か・・・」
慣れない時刻表と格闘する瑞穂さんを尻目に
「瑞穂お姉さま、ちょっと通過する電車の写真を撮ってきても良いですか？」
「えぇ、かまわないけど、遅れない・・・ってもう居ない」
僕は電車を撮影していた

東京駅でＯＧのお姉さま方と分かれて

「えーっと１・２番線なのであっちですね・・・って陽向さん！？そっちは京葉線ですよ！？・・・あ・・・でも２０１と２０９の並びが見えるかも・・・」

「歌織、陽向が転んだ」

「あー、もう勝手に動かないでください！」

寮に帰ってきた僕たち・・・僕？僕は疲れたよ・・・とっても。

第１２話に続く

第１１話「小さな姫と大きな家」（後編）（後書き）

作者「誰か俺のＰＣなおしてｗｗｗ」
歌織「また壊れたの？何台目？」
作者「過去にマジで壊れたのは１台だけ、コンデンサが液漏れを起こしてマザボがオジャンになったけど」
歌織「今度は何？」
作者「だってさ、Ｗｉｎ７のサービスパック１がちゃんと当たらなくてＯＳのレジストリをブッパしてくれたんだ」
歌織「あー、あるあるだね、でもＷｉｎ７　３２ｂｉｔのノートＰＣにはちゃんと当たったわよね？」
作者「俺のデスクトップＰＣは６４ｂｉｔだから」

歌織「さて、本日のゲストは？」
作者「合宿（爆）に名前載ってるのに一度も説明すら現れず静観していた皆瀬　初音さんです」
初音「酷いですよー」
歌織「初音さんのほか小鳥遊　圭さま・高根　美智子さま・天城真名ちゃんなど数名が登場しませんが？」
作者「だって、圭さんと美智子さんはどちらかというとお二人の世界を形成してそうで・・・・」

初音「そう言えば最後の方に出てきた２０１とか２０９とかそう言う数字はそう言う意味ですか？」
作者「スルー推奨です」
歌織「電車の形式です、ただし現実ではもう２０１系電車は京葉線を走っていません（２０１１年６月２０日をもって運行終了しました）。ちなみに・・・」
作者「えー歌織に語らせるノ長くなるので終了！」

歌織「さてとでは初音お姉さま、次回予告をお願いしますね」
初音「はっはい、次回乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第１２話「歌織の写真部活動日記！」（前編）です」
作者「１秒以下の世界でシャッターチャンスは巡ってくる、君にはそれが見えるか？」

歌織「専門用語はできるだけ解説付けますので・・・ってこれ作者さんの台詞だった！？」
初音「次回もお楽しみにね」

ご意見・ご感想をお待ちしています

第１２話「歌織の写真部活動日記！」（前編）（前書き）

作者「昨日は疲れたね」
歌織「撮影でしたからね、昨日は更新できないくらい私も疲労困憊でした・・・」

陽向「今日の前書きゲストは歌織さんです…」
作者「どうしたの？陽向さん？」
陽向「今日の話が分かりにくくて・・・カメラの話ばっかりだし」
歌織「登場人物も少ないしね・・・」

作者「とりあえずどーぞ」

第１２話「歌織の写真部活動日記！」（前編）

７月も末になって写真部で８月に撮影旅行に行くことになり明日学校でカメラの登録をする事になった

「うーん・・・まさかＤ２持って学校に行くことになるとは・・・」

※ニコンＤ２Ｈｓ：ニコンが販売していたデジタル一眼レフのカメラでニコンの最上位機種である。現在は後続機のＤ３シリーズが販売中。

「お姉さま？紅茶が入りました・・・これはカメラですよね？」

美海がいくつも並べられているデジタルカメラのボディ数台を見て驚く

「そうね、確かにこれを見ればびっくりするわね」

ボディ以外にもレンズが８本

「このリングは何ですか？」

テレコンを見て指を指す

「これはテレコン・・・えーっとテレコンバージョンレンズといって１００ミリのレンズに２倍のテレコンバージョンレンズを装着すると２００ミリの望遠レンズとして使えるの」

「すごいんですね、私には同じようにしか見えないです・・・」

そーだよね・・・僕も最初は分からなかった

「やってみたければ練習してみればいいわね」

そう言うと美海は

「私は・・・あんまりいいカメラじゃないんですけど1台だけもってます」

美海のカメラは自動露出の３５ミリのコンパクトカメラだった

「ＬＣ－Ａね、フィルムは・・・ネオパンＰＲＥＳＴＯのＩＳＯ４００を使ってるのね」

※ロモＬＣ－Ａ：１９８３年発売のロシア製のトイカメラ、現在では中国で生産されているＬＣ－Ａ＋があるがロモ社の製品ではない。

※ネオパン：富士フィルムのモノクロフィルム（白黒フィルム）の名称。本作に登場した意外にも若干の名称の違いがある。

ＩＳＯ：国際標準化機構（ＩＳＯ）が策定された写真フィルムの規格であり、あるフィルムがどの程度弱い光まで記録できるかを示す。

「イソ」と発音する。

「何でか白黒にしかとれないんですけど、どこかこのカメラおかしいんでしょうか？」

白黒フィルムを分からないで買ってるのか・・・むしろこの世代でフィルムっていうのがすごいな

「それは・・・カラーフィルムを買えばいいのではないかしら・・・」

四谷の家に未だ使ってないトライ－Ｘがあったけどあれはモノクロだし

※トライ－Ｘ：コダック製のモノクロフィルムの名称。ＩＳＯ４００。現行名は４００ＴＸ。

「これじゃダメなんですか？」

この子基本的に機械音痴なの…？

「フジカラーのリアラエースとかを使えば良いのではないかしら？」

僕は基本的にコダック派だけどまあ後は好みだし

「分かりました、今度買ってみますね」

いいけど、大丈夫かな…着いていった方が良いかな？

「もうすっかり姉の顔だね、歌織ちゃんは」

部屋の入り口になんと柚木が立っていた・・・

「柚木！？」

ちょっと！？お前は家から出られないんじゃなかったのか？

「2学期から転校することになりましたぁ☆」

なりましたぁ・・・って良いのかよ！？

「聞いてないよ？」

ケロッとすごいこと言ってること気がついてる？

「今言ったよ？」

あー言えばこー言う・・・

「お爺さまは、それで納得したの？」

あの人は転んでもただじゃ起きないからな

「転入させなきゃ一生口聞いてやんないって言ったらｏｋしてくれたよ？」

マジ？君さらっと酷いこと言うね

「お姉さま？なんで柚木さんが・・・」

美海が一人だけ会話から取り残されてる・・・

「さっすが姉さんのカメラコレクションだね、綺麗にしてるね１台を除いて…」

汚いの？５台あるボディの中で一番スレや傷が多いのは父が使っていたＤ２Ｈｓだと思う

父がＤ３を購入した後僕にくれたカメラだ。たしかシャッターがもう限界で２０万回近く切れてたはず。

※ニコンの基準としては１５万回のレリーズテストがある

「まあこの機体はよく持った方だと思うよ、２０万回もシャッターが切れてるとは思ってなかったし、私より多くの国を回ってるしね」

「そうね、じゃあ私は夏休みに越してくるから、一回は下田に帰ってきてね」

嵐が去っていった…今日は下見か

「お姉さま？お紅茶を入れ直しますか？」

なんか疲れた

「そうね、お願いするわ」

写真部撮影旅行まであと２０日

第１３話へ続く

第１２話「歌織の写真部活動日記！」（前編）（後書き）

作者「１２話でした」
柚木「早く８月開けないかな♪」
歌織「今日の後書きゲストは柚木なのね」

柚木「はーはっはぁ！諸君、私がみんなのアイドル、華麗なるＡＰＳ－Ｃ使いこと美澄柚木だよ？」
歌織「その自己紹介、分かる人少ないわ・・・」
作者「というかライカ判じゃないんだ」
歌織「それもわかりにくい・・・３５ｍｍフィルム（一眼レフカメラ等向け）とＡＰＳサイズ（新世代コンパクトフィルムカメラ向け）・・・」

歌織「どっちにしろわかりにくい・・・」
作者「とりあえず気になる人はググれ」

柚木「作者も大変だね仕事の合間に小説書くって」
作者「別に大変じゃないよ、最悪今回みたいにｒｙ」
歌織「次は大変なお仕事が９月に待ってるからね、そのときはもっと大変かも・・・」

作者「さて次回第１３話「歌織の写真部活動日記！」（後編）をお届けします」
歌織「写真部部長さんの秘密が明らかに！？って私と同じ人種？どういう意味？」
柚木「まあ現実の作者と友達に近いんじゃない？」

ご意見・ご感想をお待ちしています。

第１３話「歌織の写真部活動日記！」（後編）（前書き）

作者「先日は大変失礼いたしました」
陽向「最悪ですね」
作者「ほら仕事の関係でいろいろ・・・」
陽向「仕方ないですね、では１３話をお楽しみくださいね！」

第１３話「歌織の写真部活動日記！」（後編）

登録するのはカメラのボディのみらしいけどいつもの鞄とカメラバックという重装備状態。

ちなみにカメラバッグの中身？
ボディが３台だけだよ？

Ｄ３００ｓ＋バッテリーグリップとＤ２ＨｓとＥＯＳ　Ｋｉｓｓ
Ｘ４＋バッテリーグリップである。

※バッテリーグリップ：一眼レフカメラに装着するバッテリーを内蔵するグリップ。縦位置撮影用にシャッターボタンを備える物が一般的である。フィルム式カメラの場合はモーターを内蔵してモードライブ（連写可）と呼ばれたりワインダー（フィルム送りのみで連写不可）と呼ばれたりする。メーカーによっては下位モデルでは設定されていない機種もある（最上位モデルは元からバッテリグリップの部分をボディに持っている物が多い、例としては歌織のＤ２ＨＳ）。

「重そうですね、歌織お姉さま・・・」
いやリュックのカメラバッグならなんてことはないんだけど・・・
普通のバッグだから余計に重いよ。

生徒会室
「ではこの用紙にメーカーと機種名を書いてください」

機種１［ニコン・Ｄ３００Ｓ］

機種２［ニコン・Ｄ２ＨＳ］
機種３［キャノン・ＥＯＳ　Ｋｉｓｓ　Ｘ４］

「ただの撮影旅行にこの警戒ぶりとは、つくづくここは温室ね」

過去に誘拐未遂事件があってから厳しくなったのだとか。
寮は変わらないのに学校には変化があったんだ。
「大丈夫？」
んぶいんの何人かが少し記入に手間取っていたので聞くと

「いえ、私より部長さんを手伝ってあげてください」
部長？・・・何故か悪戦苦闘してる

「部長？」
いったいこの人は何枚書く気なんだ？
「機材の量が多くてちょっと手間取ってる」

これで６枚目の用紙だ。

えーっと１枚あたり６つ記入できるから
３６個！？
「いったいどれだけ小物を持って行く気ですか？」

見るからにでかい荷物・・・つーかどんだけ？
「交換レンズと小物が多くて・・・」

「それはこうすればよいと思いますよ」
そう言って僕はまとめられる物をすべてまとめた
例：フラッシュ（ポートレール・マクロ用など）

結局2枚に収まった。
「では受理しておきますね、登録証を発行しますので放課後にもう一度来てくださいね」
生徒会室を後にして
「なぜかどっと疲れました」
何故だろうか、あそこの人たちはまじめだなと思うけど、どこか疲れる。
廊下を歩いていたら
「おはようございます、歌織さん」
不意に声をかけられた
「おはようございます、?美さん」
?美さんだった。
「どうしたのですか?少々顔色がお悪いようですけれど」
鋭いなぁ
「?美さんには隠しきれないようですね」
生粋のお嬢様って感じだけど、どこかそれ以外の雰囲気もあるんだよな。
「よろしければ、相談に乗りますけど」
「いえ、そこまで深刻ではないので大丈夫です」
「それにしても、歌織さんはコロコロとオーラの変わるおもしろい

人ですね」
?美さん曰く僕はおもしろい人なんだとか
「そうでしょうか？」
「人のオーラはその日の体調や喜怒哀楽によって多少は変化するのですが、歌織さんはそれでなくともコロコロとオーラの色が変化するんです」
あれ？最初はこの人僕のオーラは群青だって言ってなかった？
「最近、歌織さんのオーラは見るのが困難になってきました。何か環境の変化でもあったのですか？」
「あんまり・・・・えーっと2学期から妹が転入してきます」
関係ないと思うけどね
「それだけでは変わる大きな要因にはなり得ませんね」
それから?美さんは終始気むずかしそうだった。
放課後
「これが生徒会の登録証ですので、なくさないでくださいね」
渡されたのはプラスチック製の「生徒会公認生徒備品」と書かれたカードだった。
ちゃんと機材まで載っているから驚きだ。
「厳重なんですね」

部室に戻りつつ部長に聞いてみた。
「そうですね、去年も作りましたけど毎年更新ししてるみたいですよ」

僕の所属する写真部の部長は2年生の今宮愛理さん、2年生で部長になった異端児（本人談）である。

部室にて
「どうして歌織はニコンを使っているのにサブにキャノンを使ってるの？」

部長に聞かれた
「私は機能で選んでるんですよ。最近だとニコンで新しい機種が出たじゃないですか、あれだと大きすぎたんですよ。総重量（本体＋バッテリ）５００グラム以上、７５０グラム以下、バリアングル無しで検索するとあれしかなかったんですよ」

そう、僕のサブカメラはニコンじゃなくてキャノン製の初級機を使用している。

「Ｘ４はその点で行くとすごくコンパクトだし、Ｄ３００ｓにない楽しみ方があるじゃないですか。あ！でもスナップだけって割り切って使いますから」

基本的に部活ではポートレール撮影（人物撮影）や景色撮影しか撮らないしね
「そうだよね、私はキャノンだけで構成してるけど2つのブランドのカメラを持ってると割り切って使わないといけないから大変だね」

そりゃあフィルカメラムも含めて全部キャノンで統一してる貴方はね
「レンズ管理も面倒ですしね・・・さてと、頃合いなので撮影に戻りますね」

「歌織もフィルムカメラ持ってくればいいのに」

僕は思案中だったミニチュアの撮影に戻った
「重いので考えておきますね」

Ｘ４の電源を入れたその時だった
［Ｅｒｒ　０６　センサークリーニングができませんでした。電源を入れ直してください］

「エラー？」

電源を入れ直す
［Ｅｒｒ　０６　センサークリーニングができませんでした。電源を入れ直してください］
同じメッセージだ
「嘘でしょ？」

「どうしたの？」

なんというか
「故障しました・・・って！嘘でしょ！？デジタルＸだって故障歴ないのに！？」

結局私のサブカメラはキャノンに送った。

数日後の部活にて
「キャノンによると「元々不良ロットだったため無償修理いたします」だそうです」
買ってから未だ半年もだってないのに・・・・
「次の旅行ではもう1台のサブカメラを出すしかないですね」
昔使っていた中級カメラマン用フィルムカメラを持ってくることにした。
「Ｆ１００とマルチパワーバッテリーパックで行きます」
と言うことで
Ｎｉｋｏｎ　Ｆ１００＋Ｎｉｋｏｎ　ＭＢ－１５（マルチパワーバッテリーパック）
に変更
※Ｎｉｋｏｎ　Ｆ１００とは：ニコンの銀塩一眼レフカメラでキャッチフレーズは「Ｆ５ジュニア」。大きく重くなったニコンＦ５の基本性能を維持したままに小型・軽量化を実現した。
結局登録証を作り直した。
第１４話へ続く

第１３話「歌織の写真部活動日記！」（後編）（後書き）

作者「さて第１３話「歌織の写真部活動日記！」（後編）でした」
歌織「今回のゲストは！聖應女学院写真部部長の今宮愛理さん」
愛理「どもー！」

作者「さて彼女のモデルになったのは作者の友人でカメラ仲間ですね」
歌織「そうですね」
愛理「だいたいの人物像はそのままだしね」
作者「最近８６好きになったけど」
歌織「電車の話題で主に盛り上がったり、後はアニメでしたしね」
愛理「なんというか、一番扱いにくい登場人物だと思うけれど」
歌織「何で？」
愛理「本人の目があるし」
作者「それを君が言うのか（笑）」

歌織「変なこと書いてるとツイッターで怒られてしまいますよ（汗）」

作者「じゃあ次回予告行ってみよう」
愛理「次回乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第１４話「プールサイドイベント」（前編）」
作者「歌織は泳げるのか？その真相が明らかに？」
歌織「コインの表と裏は交わらないよ？」

ご意見・ご感想ををお待ちしております

第１４話「プールサイドイベント」（前編）（前書き）

作者「どんどん時間がなくなってくよ！？」
陽向「仕方ないことですけどね」
作者「わーん・・・どんどんアイマスが溜まってくよ・・・・」
陽向「そこですか？」
作者「そこです」（キリッ
陽向「とりあえず本編をどうぞ」

第１４話「プールサイドイベント」（前編）

聖應女学院にはもちろんプールという時間が体育に設定されている。
しかし彼・・・いや彼女は拒否反応を示していた。
「無理です、私は・・・・男なんですよ！？」
深夜、歌織の部屋にて
「そう言われましても、歌織さまは身体的には問題ありません」
明日のプールについての
「それはメンタル面を含んでませんよね」
相談が行われていた
「確かにそれはそうですが、歌織さまはもう半年近くこの学院で生活なされています」
歌織は拒否、しかし史の言うこともまた正論である。
もちろん半年近く生活しているので問題なしと判断されても良いと思うのだが彼女の危惧はそれではない。
「それはそれ、今度はプールなんだよ？それも、何故か写真部の被写体にならないといけないなんて・・・」
それは先日の部活中の出来事だった
「はーい、それでは来週の活動で被写体になってもらう人を決めたいと思いまーす！」
部長である

「クジで決めるのは久々だね！」
副部長の佐藤さん・・・・・
何故こんなハイテンションかというと・・・学報に使う写真は基本的に写真部が担当する。
むろん被写体が足りないときは部員の中からも被写体を出す。
そこでクジなのである。
・・・ぽーん！
「と言うことで被写体は歌織さんに決定いたしました―！」
ボケッとカメラを弄っていた歌織は唖然
「いつ決まった！？」
「今さっき」
・・・・
翌日
「暗いお顔ですね、どうされたのですか？」
歌織が教室に入り席に着くと歩美が話しかけてきた
「問題ごとが片付かなくて・・・あ、いえ、大丈夫ですよ」
「その、大丈夫にはとうてい見えませんので保健室に行かれてはどうですか？」
メンタル面で行くのは恐らく心の相談室なんだろうがこの場合は体に支障を出しているので保健室なのかと歌織は思った

「大丈夫で・・・す・・・」

もうそのとき歌織は大丈夫な状態ではなかった

「歌織さん!?大丈夫ですか?しっかりしてください!・・・・・」

歌織は意識を手放していた

歌織は結局熱を出して早退した。

1週目プール・・・・回避

「大丈夫ですか?歌織さま」

早退後すぐに史が駆けつけて看病してくれた。

「1日目と被写体の件はどうにかなったみたいです・・・」

歌織は力なく答えた

「歌織さま、そのほかのことをすべて無駄にしてしまっては本末転倒です・・・」

そーですね・・・

「良いんです、とりあえず回避できたので・・・」

この主人公こんなことで大丈夫か?

「大丈夫、問題ない」

いやここまで来ると作者が風邪としか思えない

「歌織様、いったいどなたとお話になっているのですか?」

痛い子になったね

「気にしたら負けですよ、史お姉さま」

その夜、歌織は悪夢にうなされていた

病院のベッドに横たわるのは自分

「いや・・・お姉さん、行かないで・・・・」

そして泣いているのはどこかで見たことがある少女だが思い出せないのだ。

「――ちゃん、――お姉さんをもう、眠らせてあげて?」

寄り添っている母親らしき女性がその少女に言った。

自分の名前すら聞き取れない状況らしい

[君は誰なんだ!?・・・僕はそこにいるのに、どうして・・・]

声を出したくても声が出ない・・・

「――ちゃん・・・私・・・幸せだったよ・・・・」

歌織は自分が出した声に驚いた。それは自分が予期出ぬ言葉だったからだでもやはりその少女の名前は聞こえなかった。

[待って、僕は!]

そしてゆっくりと視界がフェードアウトして・・・目が覚めた

「またか・・・」

荒い息づかいとグッショリ濡れたパジャマ、そして酷く疲れたような感覚。

「合宿以来か・・・」

ふと鏡を見た歌織は思考が停止した

「!?」

一瞬誰かの顔がダブって見えたように見えたのだ。

そして翌日は大事を取って休み、水曜日から登校・部活（華道部）に復帰した。

しかし、２回目のプールは金曜日に迫っていた！・・・後編がホントのプールサイドイベント！？

１５話へ続く

第１４話「プールサイドイベント」（前編）（後書き）

作者「風邪ですか・・・お大事に」
歌織「私の扱いヒドイ・・・」
作者「だんだん君が男だってこと忘れてきたよ俺ｗ」
歌織「酷い、それこそ最悪です」
作者「だって書いてるとき、何でこいつこんなに拒否権発動しなきゃいけないんだっけ？と思ったもん」

歌織「それより、あの子は誰なんですか？」
作者「分からない？」
歌織「分かりません」
作者「じゃあヒント、生徒会長」
歌織「生徒会長？分かりませんよ、今の生徒会長ですか？」
作者「それはどうかな」

歌織「久々のゲスト無しですが次回予告お願いしますね作者さん」
作者「乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第１５話「プールサイドイベント」（後編）」
歌織「プールに入るときは体調管理に気をつけてくださいね」

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第１５話「プールサイドイベント」（後編）（前書き）

陽向「歌織さんは大丈夫なんでしょうか？」
作者「大丈夫なんじゃないか？」
陽向「疑問系に疑問系で帰さないでくださいよ！」

作者「とりあえず第１５話をどうぞ！」

第15話「プールサイドイベント」（後編）

「どうしてそこまでプールに入りたがらないのですか？」
未だにプールの件でナーバスになっている歌織に史が疑問をぶつけた
「入りたくない理由？・・・だって・・・その・・・胸が・・・」
お前は男子だ！と突っ込みたくなる
「・・・そのようなことを気にしている場合ではありません」
史は気にするもんだいではないとしてスルー

翌朝（金曜日の朝）、歌織は悩んでいた。
「プール・・・・不安すぎる・・・でも入るしか無いんだよなぁ」
確かに普通の男子からしてみればウハウハな状態ではあるのだが現在の歌織は精神の性別と肉体の性別のバランスが崩れてしまっているのである。

「歌織、なにしてるの？」
項垂れたところを優雨に見られていた
「えーっと・・・落ち込んでる？」
そこへ
「疑問系に疑問系で返事するんですか？」
陽向が登場
「だって自分でも分からなくて・・・」
ここまで情けない主人公が居ただろうか・・・居たな多分・・・
「史お姉さまから聞きましたよ！そうですよね、女の子ですもんね私も分かります！」
この子に胸の話題を振ったのが間違いで・・・

「・・・はぁ・・・」
何故か悩みの種は増えていた。

食堂
「お姉さま、大丈夫ですか？」
朝から疲れた顔をする歌織に美海が聞いた

「大丈夫よ、ちょっと悩みの種が増えてしまっただけだから」
歌織は笑顔で答えた

「歌織、無理はだめ」
優雨に怒られた

「はい、もちろん無理はしないから大丈夫」
そう言いつつ歌織は紅茶を入れるために台所へ入っていった
そこにいたのは
「おはようございます、歌織お嬢さま」

史だった
「おはようございます、史お姉さま」
何ともよく分からない挨拶である。

何はともあれ一日が始まる。

2年C組教室
「おはようございます。綾乃さん」
受付嬢である綾乃はいつも早くに登校してるのである

「おはようございます、歌織さん。そう言えばお聞きしました？」
女子は噂好き、それは事実である。

「どんな噂ですか？」
歌織も噂好きではないが気になる

「なんでもプールの更衣室に幽霊が出るらしいですよ」

一気に歌織の顔が真っ青になる
「え・・・・でっ・・・でもタシカプールッテ・・・・」

一気に青ざめた歌織に予想外と言わんばかりに慌てる
「大丈夫ですか？」

もちろん噂事態デマの可能性がある。
それは４年前に屋外プールから屋内プールに変更されたからである。

「確かプールは４年前に改修工事されたんですよね？」
半分涙目の歌織は確認した
「そうなんですか？私知らなかったです」

物知りなんですねと言う感じの綾乃

「どしたの？歌織」
写真部部長襲来・・・じゃなく愛理登場

「愛理さん・・・いえ、ちょっと考え事をしていたら抜け出せないループにはまってしまいました」
愛理はとりあえず歌織をなだめつつうわさ話再開

「でも、結構新しいよね？プールって」
愛理の感想はもっともだ４年というのは確かに短いだろう。なんせ以前のプールは半世紀位使用されたそうである。

「恐らくは学校にありがちな物だと思うのですけれど・・・」
愛理に良い子良い子されている歌織、何とも情けないぞ主人公。

「そうですね、私もまさかここまで歌織さんが怖がってしまうとは思いませんでした。申し訳ありません」
怖い物が苦手な歌織はこの話を聞いてプールは大丈夫なのだろうか・・・いや平気だろう。

とりあえずプールの時間
「わー歌織さんてすごく着やせするタイプなんですね」
歌織は悩んでいたこの胸の大きさで・・・

「そうですか？私としてはそこまですごいとは思っていなかったのですが」
このことで注目されるのが嫌だっただけである。

「歌織の胸ってホントに大きいね」
愛理の目が光って居る
「愛理さん！？ひゃんっ・・・」
この後、歌織は数分間愛理に玩具にされたそうである。
この後愛理が歌織のお説教を受けたかどうかはお察しください。

放課後、水泳部の活動報告用撮影会である。

そこには何故か水着姿の歌織の姿もあった。

「何故私だけ水着なんですか！？」

プールサイドには歌織の悲痛な悲鳴があがっていた。

結局歌織の受難は続いていたのであった。

「いーやー！」

第15話「プールサイドイベント」（後編）（後書き）

歌織「もう嫌・・・」
作者「お疲れさん」
歌織「ホントに疲れましたよ」

作者「さて、今回のゲストは陽向さんです」
陽向「歌織ちゃんの裏切り者！」
歌織「え？私って悪者！？」
作者「そんなの初期設定の時点でそうだったよね、まあこっちの掲載プロフィールには乗せてないけど」

歌織「まさかの事実ですね・・・というか普通に陽向ちゃんは見れば分かるはずでしょ！？」
陽向「だって歌織ちゃん・・・着やせするんだもん」
作者「仕方ないと言ったところか・・・」
歌織「でも私と一緒にお風呂入ったよね？下田の家で・・・」
作者「それは俺も初耳だぜ？」

陽向「さーて・・・次回予告逝きましょう」
作者「逝くんですね（笑）」
歌織「さて次回予告です」

作者「雅楽乃は言うは歌織には歌織の、淡雪には淡雪の良さがある。乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第１６話「歌織の華道部活動報告」（前編）」
歌織「華道って楽しいですよね、生けた後は写真に撮って今後の研究材料にしてます！」
陽向「歌織ちゃんの裏切り者ぉー！」

第１６話「歌織の華道部活動報告」（前編）（前書き）

作者「さまかの危機的状況にもかかわらず更新をするわけですね」
陽向「いい加減に締め切りは守ってくださいよ」
作者「いや、昨日は仕事の関係で死ぬほど大変だったんだぜ」
陽向「今日は大変なくせに更新できてますけど？」
作者「今日はストックしておいた小説があったからね。残念ながら次週の分はまだできてないわけで・・・」
陽向「前途多難ですね」

作者「とりあえず今週分をどうぞ」

第１６話「歌織の華道部活動報告」（前編）

歌織は２つの部活に入っていて写真部と華道部である。

しかし歌織は幼少期から慣わされたことはソシアルダンス（社交ダンス）や茶道など数多いが華道は習っていなかった。

「うーん、メインになる枝ものを決めてからが難しいところで・・・一種いけなら何とかなるんですけれどね」

※一種いけ：一種の素材でいけることを云い、その植物事態の魅力を余す事なく引き出す。歌織が挑戦しているのは「二種いけ」という一種では物足りない時に他の素材をもう一種添える。という取り合わせパターン。

「大丈夫です、歌織は見る目があるのですから焦らずじっくり決めなさい」

お姉さまにそういわれて僕はメインになる枝ものを選んでもう一種を決めていく。

「基本は夏ハゼで菊を・・・」

※夏ハゼ：正式名称「ハゼノキ」。ウルシ科ヌルデ属の落葉小高木。単にハゼとも言う。

「なんだろうなぁ・・・絵にならない」

思うような構図にならず何度も角度を変えて見る。

写真を撮り始めてばっかりの頃も確かにこんな風にしてＦ－８０１ｓのシャッターを切りまくった記憶がある。

※ニコン・Ｆ－８０１ｓ：歌織の一番最初のカメラ。フィルム一眼レフカメラ。単３電池で動くいいカメラです（友人談）。

「もうちょっと華やかでもいいかな？うたちゃんはどう思う？」
淡雪お姉さまに見てもらったところ華がないそうだ・・・メインが何かわからないからかな？

「ちょっと華の無いようにも見えますが歌織の一歩下がったところにいる性格の表れではないかと思いますよ」
ほめられたと思う。
ちなみに僕はあんまり一歩下がったところにいる性格ではないと思う。いやお姉さまから見れば全然下がっているのかもしれないけれどそれでも僕は華道部の３年生に一目置かれているという意味不明の待遇なのである。
残念ではあるけどこれが前年度エルダーの親類であるという意味なんだろうか？
そういえば千早さんは華道部に入り浸った時期があったとか無かったとか。

結局構図が浮かばないまま土日が訪れてしまった。
「パソコンで考えられないし、あとは頭の中で考えるしかないのか・・・」
そういえば写真部の作品も提出があったな・・・昔の写真を持ってこようか・・・いや手抜きはだめだ。それはイカン。
まあ明日にでもちょっと出かけて写真を撮ってこよう。

―コンコン
「歌織お姉さま？美海です。そろそろお茶をお入れしようと思いまして」
時計を見る・・・もうこんな時間なの！？

「今あけるわね」

美海を招き入れる。本当は僕も史さんの部屋に行ってお茶を入れたいのだが

「いくら歌織様のご要望とはいえそれは了承しかねます」

といわれて断られた。

「ねえ美海、明日なんだけどちょっと出かけようと思うわ。もしかしたら夜遅くなってしまうかもしれないけれどいいかしら？」

美海は僕がいないとちょっとというかかなり情緒不安定になる。

さすがにそろそろ独立せねばいけないお年頃のはずなんですけどね・・・。

「わかりました、そうすると１０時は超えてしまいますか？」

あれ？意外と普通だね。よかった杞憂か。

「そうね、１０時前には帰ってくるから心配しなくてもいいわ」

そう美海の頭をなでてあげると彼女はうれしそうに笑ってくれた。

第１６話「歌織の華道部活動報告」（前編）（後書き）

作者「というわけで１６話でした」
歌織「実際やっと１６話ですね。私としては最初の３話くらいで投げ出すものと思っていましたけど」
作者「ここまで続いてるのは奇跡に近いな（笑）」
歌織「むしろ原作のアニメが始まらないからずっと書いてるだけなんじゃ・・・」
作者「しーんぱーいないさーぁー・・・・これは原作後だからノープログラム！」
歌織「作者の頭はスッカラカンだね」

作者「じゃあ次回予告！」
歌織「ちょっと写真を撮りに出かけた私は自然の植物の命を垣間見る、そこで私が得たものは・・・・次回、乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第１７話「歌織の華道部活動報告」（後編）」
作者「その自然、想像以上！」

ご意見・ご感想をお待ちしています

第17話「歌織の華道部活動報告」（後編）（前書き）

作者「更新忘れてました」
陽向「マジですか！？」
作者「さーせん・・・」
作者「とりあえず時間もないのでどうぞ！」

第１７話「歌織の華道部活動報告」（後編）

翌朝、歌織はカメラバッグを持って寮を出た。

夏とはいえ早朝は涼しいなと思いつつ駅に急いだ。

「今日は快晴らしいしＩＳＯもそんなに上げなくてよさそうだな」

そう言って上りの各停電車に乗って東京方面に向かう。

サイリスタチョッパ制御特有の加速音が電車の中に聞こえていた。

※電機子チョッパ制御のことで、チョッパ回路を主回路（モータの電機子回路）に接続して電圧制御を行うもので、主回路チョッパ制御といわれることもある。単にチョッパ制御、もしくはサイリスタチョッパ制御というと、通常この方式をいう場合が多い。

「次は八王子、八王子です。八高線、相模線、横浜線はお乗り換えです。この電車は東京行きの各駅停車です。この電車は後続の６時１３分発、快速電車東京行きとの待ち合わせのため５分ほど停車いたします」

最近新型車両が軒並み車両故障した影響で引退が決まっていた電車を再生産するという珍事にまで発展してしまう事態になった鉄道会社に呆れかえっていた歌織ではあったが乗っていると落ち着く電車だなと思っていたのもまた事実だった。

八王子で乗り換えてその後もう一回乗り換え。

目指すは箱根。

午前８時１０分小田原駅

「よう、歌織。久しぶり」
親友の拓也だった。その方にかかっているのは・・・
「おはよう、拓也。オリンパスから富士に乗り換えたの？」
彼の持っているのは富士フイルム最後のデジタル一眼レフカメラＦｉｎｅＰｉｘ　Ｓ５　Ｐｒｏだった。
※ＦｉｎｅＰｉｘ　Ｓ５　Ｐｒｏ：富士フイルム独自の有効画素数１２３４万画素のスーパーＣＣＤハニカムＳＲ　Ｐｒｏを搭載。ボディはニコンＤ２００のＯＥＭ。

「おはよう、歌織・・・さん？」
振り返るとそこにいたのは霧島　匠くんだった。
彼にはこの体になっ手からあったこと無かったなかったな。

「お久しぶりです。匠君、カメラを買い換えたんですね」
彼の手にはα－７ＤＩＧＩＴＡＬがあった。

※コニカミノルタα－７ＤＩＧＩＴＡＬ：コニカミノルタ最後のαシリーズ。これ以降はソニー製になる。

「じゃあ初夏の箱根の撮影会に行きますかね」
箱根登山線で行く初夏の箱根撮影会スタート。
※箱根登山線は、神奈川県小田原市の小田原駅から箱根町の強羅駅までを結ぶ箱根登山鉄道の鉄道路線。箱根湯本駅と強羅駅の間は粘着式鉄道（普通鉄道）としては日本最急勾配の山岳鉄道である。
箱根登山線は基本的に箱根湯本までは急勾配は無い。
「今回はちょっと華道部にも通ずる物があってほしいな・・・」
そう歌織がつぶやくと

「華道ってあの花を飾る華道のことか？」

若干引き気味に拓也が聞いた。
「いやいや、そんなに引くこと無いじゃないか・・・僕だってまさかとは思ったよ。でも頭を使って活けるのは楽しいんだよ！」
ちょっと怒ったように歌織が言うと
「そうだよね、歌織さんの通ってるのは女学院だもんねそう言う部活があってもおかしくないよね」
そう言う匠はさっきから全く歌織の顔を見ようとはしていない。
「どうしたの匠君？」
結局のところ匠は終始歌織の顔をれなかった。

本日の歌織のレンズ構成
Ｄ３００ｓ＋Ａｉ　ＡＦ　２４ｍｍ　ｆ／２．８Ｄ
美しいボケ味を生かす画を撮りたいと言うことらしい。

さてその頃の聖應女学院　学院寮はどうなっていたかというと・・・
次回第１８話に続く。

第１７話「歌織の華道部活動報告」（後編）（後書き）

作者「第１７話「歌織の華道部活動報告」（後編）でした」
歌織「それにしても匠君はどうしたのかな？」
作者「恋の病にでもかかったんじゃねーか？」
歌織「だれに？」
作者「自分で考えなさい」

作者「さてと、時間もないので次回予告行きます」
歌織「次回、乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第１８話「歌織の華道部活動報告」（その頃学院寮では編）」
作者「歌織は良い写真を撮れたんでしょうかね？」

ご意見・ご感想をお待ちしています。

第１８話「歌織の華道部活動報告」（その頃あの人達は編）（前書き）

作者「今回は調査だけで疲れた・・・」
陽向「まあご友人と本当に試されましたからね・・・お疲れ様です」
作者「西村京太郎サスペンスじゃあるまいし・・・もうこんな事はやるまい」
陽向「おかげで注釈が多くなりましたもんね」
作者「とりあえず問題の第１８話をどうぞ」

第１８話「歌織の華道部活動報告」（その頃あの人達は編）

歌織が出発した後、陽向と真名と美海の３人はそっこりと歌織の後を付けていた。

「歌織ちゃんの秘密を暴いちゃおー」

と言う企画らしい

しかし、歌織が男であるとは気がついていない（正直作者も若干忘れていたが）

むしろ彼女たちは歌織の交友関係を見てみたいらしい。

「陽向お姉さま、降りるみたいですよ」

真名の言う通り歌織は八王子駅で降りた。

「ご乗車ありがとうございました。八王子、八王子です。この電車は快速電車との待ち合わせのため５分ほど停車いたします」

車掌のアナウンスを聞いて急がなくても良いとホッとした３人であった。歌織の下車から少しの間を置いて３人も続く。

歌織はそのまま違うホームに・・・

乗り換えホームについて歌織はなにやら電話をしているようなのだが遠くて聞こえてこない。

「何の話をしているんでしょうか・・・」

「まさか彼氏との電話とか・・・」

「お姉さまに限ってそれは・・・」

上から真名、陽向、美海の順である

そのまま相模線に乗り換える歌織

「お姉さま・・・海でも見に行くのかな？」

美海が言っているのはこのままこの路線を行くと海に出ると言うことである。しかし乗り換えられる路線もある。
「電車が来たみたいですね」
４両編成の短い電車だった。

そして全区間の半分ほどを過ぎたころに歌織は私鉄に乗り換えた。
「このまま行くと小田原ですね」
路線図を見ながら言う真名
「このまま新幹線とか乗られたらマズイかな・・・」
新幹線の停車駅である小田原駅は各路線がその方向の違いから予測がしづらい。

「ご実家に帰られるんじゃないでしょうか？」
真名が言った。
「下田のお家のことだよね？」
たしかにそのまま乗り換えてしまえば帰ることも可能だと言う感じで陽向が言う。
確かに経路によっては下田に帰ることも可能である
「あまり帰りたくないという印象を受けましたけど・・・」
美海は否定的なようだ。

歌織は改札を出てすぐのところで立ち止まった。
「どなたかまっているのでしょうか？」
彼氏でもいるんじゃないかな？という感じで真名が言うと
「あり得ない話じゃないけど・・・あんまりそういう感じじゃないよね」
と陽向は歌織の服装を見ていった

本日の歌織の服装

Tシャツ＋長袖のシャツ・ジーンズというラフな格好。
確かに「おめかし」とは言い難いがハイキングの可能性を考えると・・・
「でも、歌織お姉さまは華道に生かせる写真を撮ってくるって言っていました」
昨日の会話からむしろ撮影会ではないかという美海

しばらくして3人の知らない男性2人が登場（拓也と匠である）
「もしかして歌織ちゃんてああ見えて遊んでる系なの！？」
もちろん小声であるが陽向は絶叫した。

歌織はその男性2人と親しげに話すとなんと事もあろうにこちらに向かってきたのである。
「もしかして歌織お姉さま・・・気づいてた！？」
マズイマズイと真名がアタフタとし始める
てんやわんやになる3人であったが、その不安も杞憂に終わった。
歌織達はそのまま気づかずに行ってしまったのである。

そのまま4両編成の箱根湯本行きに乗り込んだ。
「８０００かぁ・・・４コテで未更新・・・もう見られないかもしれないね」
友人？と会話する歌織の声で何とか聞き取れたのがこの声だが何がなにやらさっぱりである。
※８０００とは小田急８０００形電車のことで、１９８２年（昭和５７年）に登場した小田急電鉄の通勤形電車。
※４コテ：４両編成の意味。固定編成を略して「コテ」。
※未更新：更新工事を請けていない車両のこと。小田急８０００形は２００２年（６両編成）からリニューアルがスタートした（４両編成は２００７年から）。

そのまま箱根湯本で下車。
「やっぱり新しいね、できて1年立ってないものね」
ちらっと聞こえてきた歌織の一言だった。ちなみにこの駅の駅舎は昨年できたばかりなので新しいのである。

その後乗り換えで強羅へ、強羅公園内を撮影した後に帰宅というルートである。

その帰路の途中にて事件発生。
陽向ら3人は歌織よりも先に帰路についた。行きと同じルートである。
先に出たので歌織よりも先に帰宅しなければいけないのだが・・・。

17時54分、高尾駅。
ホームに降りるとなんと歌織が待っていたのである。
「さて3人とも、どういう事か説明してもらおうかな？」
満面の笑みを浮かべる歌織。
「ナ・・・ナンノコトヤラサッパリ・・・・」
これまでになる慌てる陽向
「お姉さま！？なんで！？私たちお姉さまより前の電車で帰ったのに・・・」
美海の疑問に対して
「貴方たちが乗ったのは15時56分発の急行「新宿行き」ね、その後海老名で相模線の「」橋本行き」に乗り換えて橋本から横浜線の「八王子行き」八王子から中央快速の「高尾行き」に乗ったって所でしょうね」
※ダイヤは毎年改正されます現在のダイヤではないかもしれません。
「その通りです・・・・」

どうしてここまで言い当てられるのか不思議という感じの真名
「私が乗ったのは１６時０５分発の特急ロマンスカーはこね３０号（新宿行き）、町田で横浜線快速「八王子行き」に乗り換えて八王子からは中央線で帰ってきたわけ。貴方たちよりも１０分くらい前にね」
※ダイヤは毎年改正されます。現在のダイヤではないかもしれません（大事なことなので2度言いました）。

そう、実際は「急がば回れ」である。最初から陽向達が着いてきていることを知った上での経路設定だったらしい
「一緒にいた男の人はただの友達よ・・・写真仲間ね。貴方たちが考えているような仲ではないわ」

結局陽向達は歌織の手のひらで踊らされた1日だった。
第１９話へ続く

第１８話「歌織の華道部活動報告」（その頃あの人達は編）（後書き）

作者「第１８話でした」
歌織「まったく、何で僕に彼氏がいるなんて考えるんだ・・・」
作者「男に結婚してくれ！って求婚されたことは？」
歌織「無い」
作者「じゃあ結婚して！」
歌織「男にされてもうれしくない！」
作者「ジョークのつもりだったんだが・・・」
歌織「もっとわかりやすいジョークにして・・・」

作者「でも歌織はすごいね、計算通り事が運んだけど」
歌織「だって一足先に帰った拓也があの子達を見張ってたんだよ」
作者「ストーカー？」
歌織「僕がお願いしたんだよ・・・」
作者「で自分はゆったりロマンスカーで帰ったと」
歌織「新幹線という手もあったけどね」
作者「そうすると３０００円以上かかるね」
歌織「どうせ１０分しか違わないならロマンスカーでしょ？」
作者「同意せざるおえない」
※ダイヤは改正されますので当てはまらないものと考えてください。

作者「さて次回は？」
歌織「次回、乙女はお姉様に恋してる～群青の君～第１９話「Ｓｕｍｍｅｒ ｖａｃａｔｉｏｎ ａｔ ｔｈｅ ｓｕｍｍｅｒ ｒｅｓｏｒｔ（夏期休暇は避暑地にて）」（前編）」
作者「待ちに待った夏休み、歌織はどう過ごすの？避暑地ってどこ？ところで誰か着いていくわけ？」

ご意見・ご感想をお待ちしています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1282t/

乙女はお姉様に恋してる～群青の君～

2011年10月9日00時13分発行